



平成19年度

美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修

Leader Training for Art Education Using Art Museums



Leader Training for Art Education Using Art Museums

平成19年度

美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修

独立行政法人国立美術館

出会い、語らい、
〈みる〉ことを通して、
鑑賞教育と向かい合った3日間





■ 東京国立近代美術館

<http://www.momat.go.jp/>

日本で最初の国立美術館。皇居に近い北の丸公園にあり、近代以降の日本画・洋画・版画・水彩・素描・彫刻・写真など約9500点の作品を所蔵する。所蔵品ギャラリーでは、毎日2時よりボランティアによるガイドツアーがある。

開館時間：午前10時～午後5時（金曜日は午後8時まで）

休館日：毎週月曜日、展示替期間、年末年始

アクセス：東京メトロ東西線竹橋駅1b出口から徒歩3分

問い合わせ：03-5777-8600（ハローダイヤル）

住所：〒102-8322 東京都千代田区北の丸公園3-1



会場について



■ 国立新美術館

<http://www.nact.jp/>

コレクションを持たず、展覧会の開催、美術に関する情報や資料の収集・公開・提供、教育普及など、アートセンターとしての役割を果たす美術館。国内最大級の展示スペース(14,000m²)を活かし、複数の展覧会が同時進行で開催される。

開館時間：午前10時～午後6時（金曜日は午後8時まで）

休館日：毎週火曜日、年末年始

アクセス：東京メトロ千代田線乃木坂駅6出口（直通）

東京メトロ日比谷線六本木駅4a出口から徒歩5分

都営地下鉄大江戸線六本木駅7出口から徒歩4分

問い合わせ：03-5777-8600（ハローダイヤル）

住所：〒106-8558 東京都港区六本木7-22-2





ごあいさつ

本書は平成19年度の「美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修」の様子を報告するものです。

国立美術館では、昨年度より、小・中学生の美術館を活用した鑑賞教育のための指導者研修を実施しています。第2回目となる今回は、8月6日からの3日間、全国47都道府県17政令指定都市から小・中学校の教員、指導主事、美術館の学芸員あわせて139名が一堂に集まり、東京国立近代美術館と国立新美術館を会場に開催されました。

美術鑑賞は、特に成長期の子どもたちにとって意義深いものです。幼いころから芸術文化に触れ、感性を働きかけ情操を育むことは、子どもたちの精神世界を深く豊かにすることでしょう。海外の美術館でよく見られる、車座になって作品を囲む子どもたちという光景は、最近日本でも珍しくなくなりましたが、日常に溶け込むまでにはなっていません。多くの大人たちが、美術鑑賞の意義をわかっていても、なかなかその機会を子どもに与えられないままに日々が過ぎていってしまうというのが、残念ながら現状ではないでしょうか。この研修は、そうした我が国の状況を何とか改善し、学校と美術館が連携して子どもたちの鑑賞環境をつくり出そうという目的をもって行われました。教員と学芸員が、子どもと美術についていかに熱く語り合ったか、この報告書から読み取っていただければ幸いです。

研修の開催と本書の刊行にあたり、温かいご協力を賜りました皆様に、心より感謝いたします。

平成19年11月

独立行政法人国立美術館理事長
辻 村 哲 夫



実施要項（抜粋）

1 目的

子どもたちの健やかな成長のためには、幼い頃から芸術・文化に触れることが重要であり、小・中学校においても、鑑賞教育は重要な教育活動とされている。このような鑑賞教育の重要性を踏まえ、全国の小・中学校等の教員と美術館の学芸員等が一堂に会してグループ討議等を行うことにより、美術館を活用した鑑賞教育の充実及び学校と美術館の一層の連携を図るため、本研修を実施する。

2 主 催 独立行政法人国立美術館

3 共 催 文部科学省、文化庁

4 期 間 平成19年8月6日（月）～8日（水）

5 会 場 東京国立近代美術館、国立新美術館

6 受講者

受講対象者 ①小・中学校教員、②美術館学芸員、③指導主事

募集人数 ①小・中学校教員は、各都道府県と各政令指定都市から1名

②美術館学芸員及び③指導主事は、各都道府県と各政令指定都市からいずれか1名

募集方法 各都道府県と各政令指定都市の教育委員会からの推薦に基づき、独立行政法人国立美術館が決定する。

※詳細は独立行政法人国立美術館ホームページをご覧ください。<http://www.artmuseums.go.jp/>

日程表

第1日目 8月6日(月)	第2日目 8月7日(火)	第3日目 8月8日(水)
会場：東京国立近代美術館	会場：国立新美術館	会場：国立新美術館
	9:30 受付	9:30 受付
9:45 事例紹介① 美術館での実践実例 武居利史、成相鑑 (府中市美術館学芸員)	9:45 講演 長田謙一 (首都大学東京教授)	
10:25 事例紹介② 小学校での実践事例 日高和広 (宮崎大学教育文化学部 附属小学校教諭)	10:45 グループワーク発表 グループワークの成果を代 表者が発表し、講評を受ける 講評者： 長田、奥村、三澤	
11:05 (休憩)		
11:15 事例紹介③ 中学校での実践事例 中平千尋 (長野市立櫻ヶ岡中学校 教諭)		
12:40 受付	11:55 昼食(休憩)	12:30 閉講式
13:00 開講式	13:00 教材バイロット版紹介 三澤一実(文教大学准 教授)・一條彩子(東京 国立近代美術館主任研 究員)	13:00 終了解散 (解散後希望者は、国立新 美術館「日展100年記念展」 「スキン+ボーンズー1980 年以降の建築とファッショ ン」等自由鑑賞)
13:10 オリエンテーション		
13:20 講演 奥村高明(文部科学省 初等中等教育局教育課 課程教科調査官)	13:30 グループワーク② 前日鑑賞した課題作品の鑑 賞プログラムを作成する	
14:20 (休憩・移動)		
14:30 ギャラリートーク見学 児童生徒へのギャラリー トークを見学		
15:30 グループワーク① ・ギャラリー内で課題作品 を鑑賞し、鑑賞の意味につ いて考える ・学校と美術館の連携のあ り方について考える		
18:00 (終了)	18:15 (情報交換会)	

「創造的な行為としての鑑賞」

奥村 高明



ギャラリートーク

5つの事例





創造的な行為としての鑑賞

子どもから考える鑑賞教育

奥村高明

国立教育政策研究所教育課程センター教育課程調査官
文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官

紹介もありましたように、小学校、中学校、美術館で働いて参りまして、今、国の行政というところに携わっています。何かこうじゃないといけないという話より、みなさんと一緒にこの画面の中で考えていただいたらということで話を進めたいと思います。

ここには、学校と行政と美術館の、この三者がおそらくいらっしゃる。この三者をつなぐものというのではなくて一つしかないですね。

「子ども」…ということから「鑑賞」ということを考えていく、伝統とか、世の中とか、あるいは「連携」の在り方というのを考えていったらなと思っています。

全体を通して、今日のテーマである「鑑賞というのは創造的な行為である」ということが確認できればと思います。

I はじめに

口を大きく開けて読んでください。「ピカソ」はい、正解です。ではこれは、「学力」はい、正解です。でもどうして「びりょくそ」、「がくか」と読まなかつたのでしょうか。実は人というは、漢字は漢字、片仮名は片仮名と思った途端にそう読みてしまう。つまり人はわかったことから見る性質があります。では、今度はこれは何に見えるでしょう。わかる方? いらっしゃらない…。実はこれペンギンです。ペンギンに一度見えてしまうとどうですか? もうペンギンにしか見えなくなってしまうんですね。一番最初のように訳のわからなかった時のことに戻ってくださいと言っても戻れない訳です。人は一度わかると戻れない。わかったことから見てしまう上に、一度わかると戻れない。つまり、人は決してありのまま、そのままは見ていないということです。大人になってしまったら、子ども

の視線にはなかなかならない。これは、そのまま見ていないということで、仮に「そのまんま効果」と呼びます。メモされなくて結構ですよ。(笑)

例えば、日本はいつから四季になったかというと、いつくらいからだと思いますか? ずっと四季があったと思いますか? 実は日本は二季だったんです。盆と正月、正月から盆、盆から正月。それが四季というのが中国から輸入され、ほぼ10世紀に完成した。私、宮崎県出身ですので、宮崎で考えるとよくわかるんですけども、夏が5月~10月ぐらい、残りが春、秋、冬。平野部は冬でも雪が降りません。だいたい二季ぐらいだなと思います。だけど、東京で暮らしてはじめてつくづく思ったのは、四季がぴったりなんですね。新聞もテレビも、祭りも行事も食品も、全てぴったりと四季に一致している。宮崎ではズレて感じていたのですけれども。おそらく北海道の方は、そうだと思います。四季は一つの「そのまんま効果」だと思います。

じゃあこれは何でしょう? …ヒツジです。ヒツジのイメージってどんなイメージですか? 「毛がいっぱい生えてる」、「かわいらしくて、もこもこして、のてのてって感じ」そんなところでしょうかね。みなさんご存知でした? ヒツ

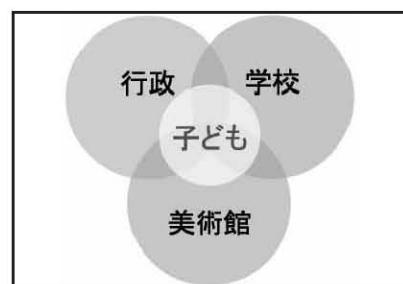
ジというのはヤギの親戚ですから、ものすごくジャンプをするんです(ヒツジのジャンプしている画像)。「おーっ」と声を上げている方は、いわゆるヒツジという文化的な「そのまんま効果」にかかっているのでしょうか。

そうやって考えると、やはりもう一度「美術」とか、「子ども」とかを見直しながら、「子どもの鑑賞」というのは考えていった方がいいのではないかというの、まず一つの提案です。

II 子どもの鑑賞

①多様な関係

まず、子どもは人、モノなど、多様な関係の中で見ている。一対一では見ていない、ということ。まず、この画像のように、たいてい子どもは友達と話し合いながら見ています。これだけでも絵と一対一で見てないことがわかりますが、関係性は友達だけではありません。これは宮崎県立美術館で撮影した映像ですけれども、美術部の中学生が来た時の様子です。その中に二人ほど、サートと駆けめぐる子どもがいます。今、部屋を出ましたね。するとここにいた監視員の方がすっと居なくなりました。監視員の人は、何をしたかというと、「この部分に説明があるよ」と、指示したんです。そこであの二



資料1

鑑賞は創造的な行為

資料2

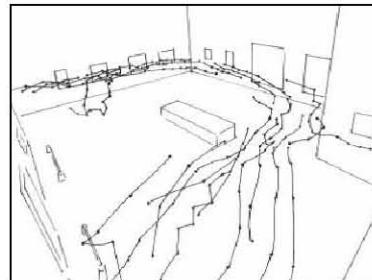
人は戻ってきて一つひとつ確かめていくわけです。ということは、子どもたちは友達とか、監視の方とか、いろいろな人と関わりながら鑑賞をしていることがわかります。

次に、これは、小学校高学年の鑑賞の様子です。遠足などになるとだいたいこんな様子ですね。1秒ごとの動きを点にして表すとこのようになります（資料3）。まさに川の流れのようです。でも、美術館が出前授業をしたり、ワークシートで「好きな作品を一つ選んでごらん」などとすると、こんな風に変わります（観覧の様子の動画）。子どもたちがバラバラに、かつピタッピタッと絵の前に止まっていることがわかります（資料4）。

たった二つの手立てだけで、このようになるということは、先ほどの人と人の関係に加えて、「出前授業」とか「ワークシート」とか、モノやコトなど、子どもは多様な関係の中で見ているということですね。

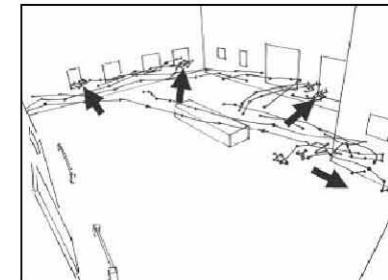
②全身の感觉

この写真を見てください。どんなことを感じますか？「かわいいな」「寝てるな」「気持ちよさそう」「寝顔がかわいらしいなあ」実はこれ全盲の子が撮りました。全盲の子どもの作品です。



資料3

みなさんが言ったようにかわいい、大好きな「弟の慎ちゃん」なんです。全盲ということは、つまりわたしたちのいう「見てて」いないんでしょう。けれども、この写真を見ておそらく多くの方は、寝息、温かい匂い、赤ちゃんの独特の匂いがありますね。そして布団の空間、奥の染みのところ、つまり部屋全体の中で「この子が居る」ということをおそらく感じているんですね。つまりこの写真を見て私が思ったのは、人は目だけじゃ見てない、慎ちゃんを寝息とか、香りとか、音とか、温かさとかいろいろなものからとらえているということです。同じように、これは『海』というやはり全盲の子が撮った作品です。今、横浜で展覧会が行われているそうですけれども、空を飛ぶ鳥の声とか、キラキラ光る様子とか、いろいろな空間の中で初めて、わたしたちは海をとらえている。だから美術館ではこんな子どもの様子が見られたりする。ほんのちょっとした音が壁から聞こえてきたら手で確かめてみたり、耳で確かめたりする。視力だけで世界をとらえているわけではない。ということを考えると、こんな風にスッと子どもが彫刻の前でしゃがんで、同じポーズをとることは、子どもが全身で味わっているということとして考えることができる。この姿を教師がとら



資料4

えることができれば、こんな授業もできるんでしょうね（資料5、6）。全身で味わっているんでしょう。でもそれは子どもだけのことではなくて、こういった茶碗、古物商の方はこういう茶碗のことを「これは、これは、いいお仕事をされてますね」とは言わずに「おさまりのよい形ですね」と言うんだそうです。「おさまりがよい」ということは、自分の手の平にのせている訳です。しかもそこで温もりを感じているんでしょう。大人だって視力だけではなくて、いろいろな感覚を生かしている。

③対象との一体化

子どもは対象と一緒に見ることについてお話をさせてください。これは宮崎県立美術館にあった作品ですけれども、ちょうど残酷な事件があった時でした。この彫刻（首のない像のひざの上に、首のある像が座っている）の周りにダーッと低学年の子どもたちが集まりました。幼稚園児だったかもしれません。私が面倒を見ようとそばにいたら、ある女の子が「うわっ首が一つしかない！」って言つたんです。首が一つしかないと言われて、どうしよう、どうやって説明しようと悩んだ瞬間に隣の男の子が、「いいんだよ。二人で一つだから」と即座



資料5 札幌市立三角山小学校

に答えた。エッてびっくりしたんですけども、この像の題名は「二人の像」。本当に一つでいいんです。

あるいは、この彫刻の作品ですけれども（バネの先に農機具がついている）、普通はこれは「あん？わからん」と言って通り過ぎる作品なんですよ。これをある小学生がパッと見るなり「アミサイル！」って言つたんです。私はちょうどその場に居まして、「ちょっと僕、教えて。どうしてこれミサイルだと思ったの？」って言つたら、「どうしてこの大人はそんな簡単なことがわからないのかなー」という顔をしながら説明してくれました。面倒くさそうに「あのねー、おじちゃん、ここがこうぐるぐるぐるっと上にいくでしょ？（バネの部分）でね、落ちるわけ。そしてここがね（農機具の部分）、壊すんだよ町を。わかった？」「ありがとう。わかったよ。」題名は『武器の競技』……戦争批判なんです。どうして子どもというの、そんな風にスッと作品の本質のようなことが突けるんだろう。いろいろな子どもたちを見てきて私が思うのは、おそらくこんな風に見てない。作品と対峙するように見てないように思います。というよりも子どもはこんな風に対象と一緒にあって、作品を見ているというか、作品になり



資料6 札幌市立三角山小学校

きってるというか、味わうというか、そういうところがあるように思います。例えばこの近代美術館にある作品（福田平八郎『雨』）。この作品どう思われます？ パッと見て感想を、はい、「瓦がきれいだな」「ずっと続いているな」「雨が降ってきたな」「色がきれいだな」ほとんどの方がやはりこれを見て立場から言ってますよね。小学校6年生が何て言つたかというと、「空が暗くなってきました」です。瓦になりきってから空を見あげているんですよ。多くの大人がそこ、今、自分が座っている立場から見てたんですけれども、子どもはまるっきり逆で、この作品と一体となって感じている。

同じような事例で「彫刻にインタビュー」という実践の中でのぎごとです。「彫刻にインタビュー」というのは、先生が、「彫刻の気持ちになるにはどうしたらいいかな？」と子どもたちに聞いたら、「先生簡単だよー。彫刻にインタビューすればいいんだよ」と、インタビューの項目も答えも子どもたちがつくるということで始まった実践です。これ（資料7）について、みなさんだったら、どんなインタビューを考えますか？ 「何の曲ひいてるの？」私もそのぐらいしか考えなかつたんですけども、子ど

もは違ったんです。（映像を見ながら）この子が「何をしてるかっていうと…」というと、友達が「ギター！」と答えます。でもこの子は、「いや、ギターじゃなくって、えっと、あっそうだ」といつて、何と書いたかというと、Q「何をしていますか？」A「小鳥たちがきいていて、友達ができて嬉しい」どうでしょう？ この彫刻になっているんですね。そして周りの友達とか木々とか、そこにおそらくそこにはいない小鳥とかを思い描いています。どうも子どもたちは対象と一緒に化して見るという傾向があるように思います。

④発達の特性

その子なりの発達で見る、「発達」ということそのものがやはり我々がはまりそうな「そのまんま効果」です。これを見てください。ナタで果物を割っています。生後11ヶ月です。こんな子が日本に居るでしょうか？ この部族は、3～4歳でお母さんが粉をひく手伝いをやって、男の子は狩りの練習をして、12歳くらいで全ての生活に必要な技能を身につける。日本では考えられないですね。生存率の問題、狩猟民族であるとか、遊牧民族であるとか、いろいろな条件で子どもたちの発達は変わるわけです。マ

ヤ族では7歳で斬削り、家族の責任を果たす。つまり先ほどの子どもたちはこんな社会の中（家族全員で労働している写真）で生きているわけです。こんな社会の中で発達するとあるようになるのかもしれません。日本もおそらくかつてそうだったのでしょうか。

これは戦前、昭和16年の小学生の絵（資料8）です。いずれにも人々が出てきている。人々の社会の関係性が見える。おそらくこれを描いた子どもは、人はこんな風に働いているんだなとか、うちのお父さんえらいなーとか感じながら描いたことでしょう。描かれたおじさんやお父さんは描かれたことによって非常に嬉しいかもしれない。自分の仕事とか誇りとかいうものを確認できたかもしれない。つまり一枚の絵を描くということが、社会にも影響を与えていく。だから「生活画」ということの意味があった。今描けと言われても、子どもは描けない。「お父さんの働いてる絵を描いてごらん」と言っても抽象画になってしまいます。ドアから出たっかりわからないんですから。今、働く人々を豊かに描くような絵は、東南アジアから出てきます。その子たちにはきちんと意味のあることなんでしょうね。

つまり、発達というのは、文化、社会と密接に

関わっている。鑑賞を考える時、やはり鑑賞にも発達があるわけですね。学校と美術館の連携、学校で鑑賞を何か行うという時にはこの発達について考えた方がいいでしょう。

鑑賞の発達について見てみましょう。この絵（資料9）について、どんな感想をもらしますか？

「海が荒れてるなあ」「荒々しいな」「こわい」「洪水が起らなければいいな」私も思いました。小学6年生の子の書いた感想です。「絵の中の一羽のカモメに惹きつけられました。カモメを見ると私が一人ぼっちで聞っていた時の気持ちを思い出しました」何か深い経験があるのかもしれません。「私の中にある海がとってももうねつていて、自分でもコントロールできなかった気持ちと重なったので、私はこの絵が好きです」自分の経験、作品と一緒に化してスパッとの言葉を書く。私もこの感想を見て、「自分では書けないな。大人になっちゃったな」と感じました。これが小学生です。なりきっちゃうんですね。この絵の中に入り込んでる。

中学生だとどうなるかというと、自分の好きなものを集めて美術館をつくりましょうという実践なんですけれども、この花札（資料10）の解説がここに書いてあるんですが、みなさんだったらこの花札にどんな解説をつけますか？



資料7 札幌市立三角山小学校



資料8



資料9

考えてみてください。中学2年生の解説を読みましょ。う。「稜線の弧と月が接さんばかりに近づいているので、山の向こうから月が昇ってきた感じがよく出ています。月が真ん中の正中線から離れていますが、あえて離すことでの動きを感じられます」こんな的確な解説ができる学芸員が居るのかなと思うくらい、きちんと色や形から分析的に作品をとらえています。さすが中学生。

では高校生はどうなるんでしょう。アートライター大賞というのを筑波大学でやってまして、その最優秀作品なんですが、これは自分の描いた絵(資料11)についての論文の一節です。「最初に黄色にするつもりだった蜜には、大量に赤が入った。タッチが激しくなり、線のうねりは大きくなつた。硬いはずだった魚の鱗は、いつの間にか半固体のような質感になつた」なるほど、自分の描いた感覚もとり入れながら、しっかりと書いてますね。さらに、「小学校の頃イジメがあった。その子は毎日殴られ、囮まれ、物をぶつけられ、笑われ、罵声を浴びせられた。誰も口をきかなかつた。その子とは、私。完成了時に絵の中の自分と目が合つた。絵が叫んでいると私は思った。『私はここに居るんだ』と言っているような気がした。『ああ私は生き

てるんだ』と思った」……全身の感覚を働かせるということも、対象と一体になるということも、自分の経験を生かすことも、色や形から考へるということも、きちんと高校生になるとできるんじゃないですね。これがおそらく鑑賞の発達ということではないでしょうか。理論づけられるものではないけれども、子どもたちから見ると、なるほどなというところが見えてくると思います。

⑤伝統と文化

みなさん、これ(男性が着物着ている)見ておかしいと思いますか?思われない。じゃあこれ(男性がスカートを着ている)は?笑い声が出てしまったということはおかしいんでしょう。でも外国の方にはどちらもロングスカートですよ。わたしたちは前者を一瞬でおかしいとは思わないんです。それが伝統文化というものではないでしょうか?

例えば「青田風」です。夏の風です。青々とした田んぼの上を風がサーッと走ると風の道が幾重にも折り重なって生き物のように動く。おそらくここに居る多くの方がこの青田風がわかる。この写真を見た時に、その場に立っているような気になる。わたしたちは、こういう空間

に住んでいるんでしょうね。

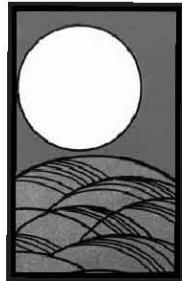
伝統というのはわたしたちの中にそもそもあるはずなんです。子どもたちでもわたしたちでも、高齢の方であっても、そういう自分たちしさを発見するところからまずスタートする。いきなり訳のわからないものを「これだよ」と言つて教えるのを、ちょっと一步立ち止まって、子どもたちの中から、あるいは自分たちの中から発見していくということを考えるといいのかなと思います。

でも、色の勉強というとすぐ12色環やるんですよ。どうして自分たちの好きな色、自分でテーマを決めた色というのを集めたりしないのかなと思うんですけれども、いきなり12色環、色の混ぜ方、混色とやっちゃう。伝統と文化ということをもっと大事にすると違うアプローチもあるのかなと思います。

伝統と文化の文化ということを考えると、結構無視された美術というのもあって、これ私の持っている本『日本全史』という本なんですが、埴輪、浮世絵、下の方には仏像もあります。みんな真面目な顔をしていますよね。どうして笑顔の埴輪は載らなかつたんでしょう。満面が笑顔の埴輪は実際に日本のいろいろなところにあります。江戸時代の絵にも本当によく笑っているものが

多い。木喰の仏像もそうですね。こういう笑いの美術がしっかりわたしたちの中には流れているのに無視されてしまってるのかもしれません。子どもから見るだけではなくて、こういったわたしたちの身の回りの美術ということをもう一度見直すのも、伝統では必要なことかなと思います。

誤解された美術というのもあります。モネいうと多くの方がほとんど誤解、というかどうかわかりませんが、印象派、自分の印象を描いた人という印象、考えをもってるかもしれない。けれども、連作を確かめると、ボーッとしたのを描いてるんではないとわかる。湯気とか空気とか空間とかそういうことをきちんとモネは描いている。あるいは『睡蓮』。『睡蓮』という題名がついてるので、みなさん、睡蓮を描いたと思っているけれども、何枚も見ていくと、睡蓮と水面だけで、水の深さ、水面の奥行きなど、実にきちんと自分の見たこと、感覚したこととらえて描いてますね。自分の印象を好き勝手に描いたんじゃないんです。だけど中学校とかよくやるんですけど、「はい、今日は印象、自分の好きなように描いていいから」。それは印象派とは違うと思います。あるいはピカソは立体的な写実だと言う人も居ます。最近の脳科



資料10



資料11 白崎 薫『心』

学では、ピカソのこういった絵は脳の仕組みには非常にぴったりだと。人はこのように人をとらえているということを指摘する研究者も居ます。でも、中学校とか小学校でよくある実践なのですけれども、「今日はピカソだよ」「何それ？先生」「好きに描いていいよ。目どこにやってもいいです」それは福笑いです。ピカソではありません。だけど、「今日はピカソ」とか言ってやっているんです。そういうことがまた誤解を生み出しているのかもしれませんですね。こういったことも美術をちょっと勉強してみると気づくかもしれません。

III 学校と美術館の関係

学校と美術館にはちょっとした齟齬があります。その代表的なのが、学校が美術館に任せっぱなしになる「外注」です。「美術館に行けば何か学ぶだろう。学芸員さんよろしくお願いします。私何もわかりませんから」。あるいは美術館の方の「入館者増」。「子どもの頃来たら、大きくなつて美術館に帰ってくる」。子どもは魅じない。もちろん入館者というのは大事ですけれども、こういったすれ違いがあって、両方とも全然子どもに視点がないんじゃないかなと思うことがある。もっと社会的なところから

考えた方がいいと思います。

例えば、美術館というのは、美術品だけ収蔵してる場所じゃないんですね。美術館ができたことによって、虫干しを何週間おきにやつたらいののかとか、軸はどういう風に丸あるのかとか、どこに保存するのかとか、民間にあったノウハウまで全部美術館が吸収するわけです。同じように学校も学校がなかった時にはそうじゃなかったのに、子育てや教育というノウハウを吸い込んでしまうわけです。そもそもそういう機関というか装置なんですね。ですから、学校も美術館も一つの社会の機関として、そこで子どもを育てましょうよ、というところにまず立つ必要があると思います。そうでないと、競作戦と外注がまかり通ってしまう。両方とも社会的な機関ですから、連携では、「どんな力を子どもに育てるのか」というところをまず共通目標としてスタートしていったら随分子どもたちも変わってくるんじゃないかなと思います。例えば、3日目に講演をされます長田先生のお考えですが、「形や色、視覚文化などに主体的に関わってそれらとコミュニケーションしながら自ら世界を構築しようとする」力を、美術館と学校と一緒に育てましょうというところから始まれば、「これが教えたい」とか「任せたい」

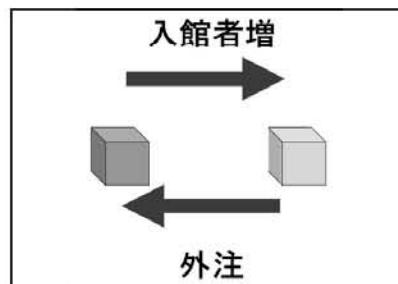
というすれ違いがなくなるような気がします。まずはこういった共通の目標というところから始める。

京都造形芸術大学の福先生が紹介していますが、アメリカでは、美術館はもう単なる教育だけではなくて、「人々の生活や社会が実際に直面する問題に密接に関わり、役割をもって、人々が既にもっている知識・考え方・感情に何らかの変化を及ぼし、問題提起を行い、価値観を揺さぶることのできる公共の施設」として考えられているそうです。名画を提供するというよりも、そういう役割が美術館に求められているのでしょうか。けれども、この考え方は、学校でも適用できる。むしろ、これからの学校像を示しているような感じもします。学校だけに役立つ力を育てるのではなくて、生活とか社会に密接に関わりながら、責任をもって生きていけるような力をきちんとつける。まさに今の中教審の答申の方向なんですね。子どもの価値観を揺さぶって、子どもの感情とか知識とかを変化させて、これがおそらく今日から3日間行われる鑑賞で、先生方が体験されることだろうと思います。実体験できるのはまさにこのポイントではないかなと思います。

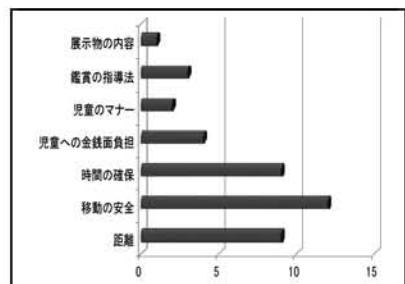
IV 美術館を活用した事例

美術館に行かないのはなぜですか？とか、困っていることはありませんか？と問うと、時間の確保、移動の安全、距離、金銭面の負担とかが出てきますけれども（資料13）、よく見ると、下から4つはそんなに急に変えられる問題じゃないんですよ。よく見していくと、結局、上の3つ、先生たちが困っているのは、特に鑑賞の指導法というのがわかる。下は行政とかいろいろお金とかがかかるりますから。やはり先生たちは指導法で困ってるんだなということで、今日は全国の実践の中から4つだけ紹介させてください。

①ティーチャーズガイド（北九州市立美術館）
学校と行政と美術館の三者の委員会がティーチャーズガイドをつくりました（資料15）。他のティーチャーズガイドと決定的に違うのは、全て実践に基づかれています。だから、ティーチャーズガイドの中に子どもの姿があります。子どもからこんな言葉、こんな活動が出来たよと的確に書いてあります。これは齊藤義重さんの作品を前に、そこからさらに表現した作品『草原の空』です。「思い切って一面に黄緑色を塗りました。次に水色を塗りました。寂し



資料 12



資料 13 棚本忠和「鑑賞教育アンケート調査」より



資料 14

資料 15

く思えたので彫刻刀でいろいろな模様を彫り、コンテで色をつけました。青い青い空と草原が自然に頭の中に浮かんできました。こういう子どもの能力から表現と鑑賞の関連を考えていることが参考になると思います。

②アートゲーム

これはさっき言った作品と同じポーズをとってジェスチャーゲームしている様子ですね。これは、小学校2年生が美術館で販売されている絵葉書を使ってカードゲームをやっています（資料16）。指の動きを見ると、なかなか子どもたちがよく考えているのがわかりますね。今、日本中のいろいろなところでアートゲームが開発されています。

③対話型鑑賞

対話を生かした鑑賞の実践も増えてきました。対話というのは、日本の、特に小学校では一般的な授業方法の一つですね。例えば、まどみちおの「ぞうさん」という詩を使ってやってみましょう。まず、この詩をみなさん読んでください。はい、じゃあもう一度、はい、じゃあ今度はこちら半分が読んでください。こちら半分が聞いてください。はい、じゃあ今度はこちら半

分が読んでください。こちら半分は聞いてください。じゃあ一緒に読んでみてください。今4回読みました。もう4回目にみなさんの読み声が変わっているにお気づきですか？読み方が全然変わってきてるんですよ。

小学校では、さらに、「どうして語尾を上げて読んだの？」「だってね。お母さんがね、好きななんだもん」などのように、先生や友達との対話を繰り返していくながら、詩を読み込んでいくんですね。子どもの声をまず受容して、「どこから？」ってきいて位置づけたり、言葉の足りない子どもたちに「こういうことかな？」と補足したり…。さらに、「それって誰々くんと一緒にだね」と交流させたり、「それは○○だよ」と知識をタイミングよく与えたりとかしながら、詩をみんなで解釈していくのです。いきなり「まどみちおはね、動物の詩をたくさん書いてね、そして何年に生まれてね」とはやらない。子どもたちの意見をつなげて「さあ、みんなの意見をまとめるね」と言ってまとめるんです。それでいて、まどみちおさんが訴えたかったことにきちんと気づくんです。①子どもの発言の内面をとらえて、②意見を交流させて、③知識をタイミングよく材料として使って、④子どもの言葉でまとめて、よし今日はこんなことが

勉強できたね、ってやるんですよ。小学校では、社会だって国語だって算数だって基本的にそうなんです。

実を言うと、私は中学校の教諭から小学校の教諭になりましたので、このことが目から鱗だったんです。そんなことやったこともなかったから。だから小学校、中学校、もっと交流するといろんなことが学べるような気がします。

これは『海』というここの作品です（資料17）。これを今のように子どもとの対話を大事にしながら授業をしていくと、例えば、これは当時の絵葉書とか雑誌とかいろいろなものを集めて作られた作品ですけれども、その方法とか、どうしてそういうことをやろうとしたのか制作の原理を探るような子どもの姿が見られました。見ていてちょっとゾクゾクしました。授業が終わってからも一回教室に戻ったのに帰ってきて「先生！あれね、題名付けるとしたら、『空想と現実の世界』だなあ」と言います。でも「作者が」ということはひと言も言ってないんです。「自分が」なんです。子どもが『海』という作品をつくっているんです。

例えばこれはあるギャラリートークの場面です。難しい顔をしていたおじいちゃん、おばあちゃんたちがだんだん楽しくなって、盛り上

がって、最後にはおばあちゃんが前まで出てきてしまう。もう即席のコミュニティができ上がったようですよね。

私の経験から言うと、15人程度が美術館のギャラリートークの限度です。この画像（ボーラ美術館でのギャラリートーク）では5人なので、当然10人くらいの空間が余ってるんですよ。後ろでじっと見ている男性がいるでしょう。「じゃあこの問題がわかる人」って言ったらその人が「はーい」とちゃんと埋めるんですね。ただこんなこともあります。前に2枚置いて、「どちらの絵が好きですか？」という質問をしました。大人のギャラリートークです。この人を見てください。「うーん、うんうん」と言います。何か発表するかなと思ったら、しなかった。後から理由を聞いたたら、「どちらの絵が好きですか？」と聞かれたので、絵に入らないで、聞いてる側、つまり先生の方に思考が回ったんだそうです。そんな風に質問によっては絵から引き離すこともあります。

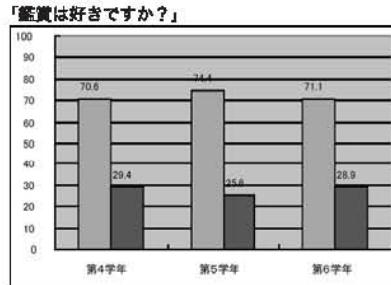
これはボーラ美術館の学芸員から何った話ですが、いろいろ子どもたちと語り合った後に、学芸員の方が「ピカソが初めて結婚して、初めての子どもを描いたの」と言った途端、子どもたちの目がサッと曇ったそうです。学芸員の方



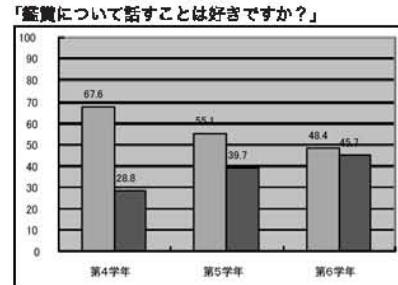
資料16 宮崎大学教育文化学部附属小学校



資料17 古賀春江「海」1929



資料18 国立教育政策研究所



資料19 国立教育政策研究所

は忘れられないと言ってました。子どもたちには、自分たちが考えてきたことが全てだったんです。知識を与えるなと言ふことではなく、場とかタイミングとかいろいろな問題を考える必要があるということです。

さらに実際に作品の作家と関わるということがよくありますけれども、できれば正解を得ることではなくて、一緒に作家と考えるという風になつていかたらしいなと思います。でないと、正解探しになります。

このアンケートは国立教育政策研究所が行ったものですが、「鑑賞は好きですか?」という問いに多くの子どもたちは好きと答えている(資料18)。でも「鑑賞について話すことは好きですか?」それほどでもない(資料19)。気をつけてください。

④学校美術館

これは3日間だけ学校美術館という長野県の中平先生が行った「とがびプロジェクト」の1シーンです。展示を担当した子どもたちに「どうして社会と関わるの?」といふじわるな質問をしてみました。すると「中学生だけの空間じゃなくて、歳を超えたおばあさんとかおじいさん、小さい子どもも一緒になってやりたい」というこ

とで、コミュニケーションを幅広くとりたいなということで、やはり地域と関わるといいなと思つて。体験活動もあるんですけども、小さい子がすっごく楽しくやってるんですよ…」と見事に答えました。決してペラペラしゃべる子じゃないんだそうです。だけど、この勉強を通して、社会との関わり、中学校ではなくてどんな風に関わるかという力をおそらく身につけたんでしょう。中平先生が言ってました。「子どもは、しゃべらせようとしても駄目だよ。しゃべりたければしゃべるから。子どもが自分で話したくなる学習を組織すればいいんですよ」名言だと思います。

V おわりに

「鑑賞は創造的な行為である」自分と一体になつたり、対象と一緒になつたり、自分の感覚を生かしながらそこであたかももう一つ作品をつくり出すかのような創造的な行為であるという話をしました。そこでおそらく子どもたちは、自分なりの意味とか価値とかを見つめているでしょう。それは表現だけでなく様々なことを創造していく力につながっていくのであろうと思います。そのためにはわたしたちは何をしていけばよいか、という根っこになる

なと思うことだけ押さえて終わりにしたいと思います。

これは最近、伝統工芸に指定された作品(資料20)です。これをつくったおばあちゃんの語つてたことが何を大切にしていけばいいのかという一つの答えかなと思いました。

「かあちゃんは、私が見よう見ま似で何かつくると、『よくできたなー』って必ずほめてくれる人だった。どんなに下手でも絶対に怒らないでほめてくれた。だから私、喜んでいろいろなものをつくったの。今こんなに幸せなのはね、かあちゃんのお陰だわね。だから感謝してるの」あるCMに「命は、たいせつだ。命を、たいせつに。そんなこと、何千何万回言われるより、『あなたが、大切だ』誰かがそう言つてくれたら、それだけで生きていける」とありました。あのおばあちゃんは、それをずっと小さい頃からお母さんに言われ続けてきたんです。

この絵(資料22)はどんなですか? 担任の先生が教えてくれました。「空がね、普段より一生懸命塗られてるんですよ。太陽が普段より大きいんです。普段の倍の笑顔で描しそうでしょう?」でも、この時にこの子はすでに車椅子だったんです。酸素ボンベをつけてますから自分の足じゃ立ってないです。お母さんがつ

きっきりなんだけれども、お友達と遊んだ楽しさを思いっきり描いています。これが最後のこの子の作品です。10月に描いて11月に亡くなつたんだそうです。

おばあちゃんも、この子も、今という時間をせいいっぱい生きています。私が伝えたいのは、鑑賞も同じことだろうということです。今学校に居る子どもたちだって同じことだらうと思います。子どもたちというものは毎日毎日その瞬間その瞬間を、かけがえのない瞬間を生きているんだろうと思います。道端の石、映画のポスター、畳屋さんの動きを、ずっと見ていた記憶が私にはあります。先生方にはどんな思い出がありますか? 鑑賞というのは、何を大切にしないといけないっておそらく根本は「みる」っていうことのかけがえのなさ、それを大切にすること、これを一つ中心にポンッと置いて、一つひとつのものごとを考えていったらいいんじゃないかなと思います。



資料20 久保田節子「ヒロハ細工」



資料21



資料22 横浜市立中和田小学校

グループ「い」 動き出すきもち

対象者：筑波大学附属小学校5年生 15名
 指導者：柴崎 裕（多摩市立多摩第三小学校教諭）
 寺島洋子（国立西洋美術館主任研究員）
 作品① 北脇昇『クオ・ヴァディス』1949
 作品② 白髪一雄『天慧星拝命三郎（水滸伝豪傑の内）』1964
 使用教材：紙、色鉛筆

活動のながれ

作品①（柴崎メイン）

1. 自由鑑賞

- 「しばらくよく見てごらん」
- 2. 気づいたことを聞く
- 3. 見意見をもとに考察を深める
- 4. 見意見を時々まとめながらさらに聞く
「戦争」という言葉も出てくる
- 5. 指導者が主人公に扮してポーズをとり、子どもが話しかける
- 6. 子どもが主人公に扮してポーズをとり、ひとこと
「どっちに行けばいいのかなー？」
- 7. まとめ

作品②（寺島メイン）

1. 自由鑑賞

- 「近づいたら離れたりとにかく見てみよう」
- 2. 気づいたことを聞く「動き」「色」など
- 3. 2人組で絵を描く（色鉛筆で会話をするように線を描き合う）
- 4. できた絵を作品の前に並べて鑑賞する
- 5. まとめ

受講者感想（抜粋）

子どもたちの反応にびっくり

子どもたちの反応で「戦争」や「死」といった言葉が多いのにはびっくりしました。子どもの中でイメージされる言葉は、社会の状態を反映しているのかどうかになります。色鉛筆の絵を作品の前に並べるアイデアはナイスです。

考えること、話すことについて重点を置いた内容

最後、意見の総合を行わないあたりが驚きであり、作品の意味、作者の意図から離れていくことを恐れず、考えること、話すことについて重点を置いた内容は面白かったです。白髪一雄の作品は足で描いて思うようにいかないところや、その迫力というものが見過せないところかと思いますが、思いを色や形にのせる制作は大変面白い展開でした。



ねらい

絵を見ることの楽しさと自分らしい見方・考え方を促すトークです。今回は、気持ちや心の動きを共通の要素として、内容・表現方法の異なる2点の絵を鑑賞します。それぞれの表現の巧みさ、大胆さ、面白さに注目しながら、そこから感じられる気持ちや心の動きについて、思ったこと、考えたことを出し合い、そして確かめます。

言葉であるいは言葉以外の形で表現してみるとによって、また新たにくぎ出しきもち ときもち>…ウゴキダセ！キモチ！

子どもたちの興味いっぱいの様子

画用紙と色鉛筆を取り出したときの子どもたちの興味いっぱいの様子を見ると、少し手間ではありますが、実際に美術館まで足を運ぶこのギャラリートークも有意義なものであるなと感じました。

「知識」を与えるべきでしょうか？

児童が戸惑うことなく参加していて楽しそうなのが印象的でした。ただ児童は「鑑賞慣れ」しているようでした。初めての児童たちでも、こううまくいくものでしょうか。児童の意見はどれも豊かな発想力を思わせる驚くべきものでした。今回は意見を聞いて終わりでしたが、児童から答えを求められることはありますか？ 求められた場合、「知識」を与えるべきでしょうか？

グループ「ろ」 鑑賞探検

対象者：筑波大学附属小学校5年生 15名
 指導者：西村徳行（筑波大学附属小学校教諭）
 作品① 古賀春江『海』1929
 作品② 清水登之『街の掃除夫』1925
 使用教材：ワークシート、鉛筆、パインダー

活動のながれ

鑑賞に入る前に、いろいろな作品を見ながら歩く

作品①

1. 作品をまず見る
2. 作品に背を向けて座らせる
3. 画面の中に見つけたことを絵を見ないで発表
4. あらためて作品を見る
5. さらに、気づいたことをワークシートに書く
6. ワークシートをもとに発表し、考察を深める

作品②

1. 作品を見る
2. 絵を見ながらワークシートに気づきを書く
3. ワークシートをもとに発表し、考察を深める
4. 指導者はいろいろな意見が出たことを評価してまとめる



ねらい

絵の中に描かれた人やものを一つひとつじっくり眺めていると、そこには不意に空気や風の感触、また匂いなど、実際には描かれていないはずのものが感じられることがあります。「探検鑑賞」では、さまざまな見方・考え方で作品に接することを楽しみながら、子どもたちがまるで絵のなかに入していくような感覚を味わえるような鑑賞活動を行いたいと思っています。

受講者感想（抜粋）

発見の喜びは教師の共感によって倍増

すぐに鑑賞する作品に触れさせるのではなく、いろいろな作品の前を子どもたちと話しながらゆっくり歩き、まるでウォーミングアップのようでした。2枚の作品は、たくさんいろいろな物が描かれていて、子どもたちにとって絵について語る手がかりが豊富で、子どもたちは話の根拠を見つけたり、比較して考えたりできていたと思います。また、2枚目の作品に入る時に「普通」という言葉を強調した、子どもの心を搖さぶる投げかけが効果的だったと思いました。だから子どもたちは背伸びしたり、のぞき込んだり、身振り手振りを交えながら、絵の世界に入っていました。いろいろな物や事を発見した喜びは、教師の共感によって倍増されていたように思いました。

自分の言葉で話すことの大切さ

1枚の絵を前にして、そこに見えるものから感じたことや考えたことを自分の言葉で話すということが何より大切なことと考えます。今日の子どもたちのそのところがしっかりときていて感心しました。指導する先生の受容的な対応が安心感を与えていたからだと思います。いつも思うのですが、鑑賞活動を

した後に、何か自分の中に変わったものができたというような感じが、少しでもないと、高学年から中学生の子どもも満足感（知的）が得られないのではないかと。終わり方をどのようにすべきか、子どもにとって今日の新しい財産となる気づきをどう与えてやればいいかが、難しいところだと思っています。

絵のコピーが載っている用紙

子どもたちに、絵を見て発見したことを書かせる際に、ただ白紙に書かせるのではなく、絵のカラーコピーが載っている用紙に書かせるのはよいアイデアだと思った。絵の周囲に余白が取ってあり、子どもも書きやすそうだった。一度チラッと絵を見た後、あえて絵に背を向けて絵について話すやり方も面白いと思った。

見せ方

作品を見せる際、離れて見る、一時的に見せずに（最初に見た記憶を元に）発言させる、時間を区切って近づいて見るなど、単に「よく見る」以上に効果のある見せ方をしていた点が興味深かった。予想以上に子どもたちは能動的に見（慣れている？）、活発に発言していた。先生も発言の少ない子にも気を配り、様々な意見を引き出そうとしていた。

グループ「は」

みてつくる「MOMAT 五行詩」

対象者：筑波大学附属小学校 5年生 10名
 指導者：安斎紀子・川上好美（東京国立近代美術館
 解説ボランティア MOMAT ガイドスタッフ）
 作品① 太田喜二郎『新緑の頃』1911
 作品② 同じエリアから児童が選んだ作品
 使用教材：ワークシート、鉛筆、パインダー、短冊、マグネットボード

活動のながれ

作品①

- 全員で座り、作品を見ながらディスカッション
- 子どもの気づきに対し、その都度質問を投げかけ発展させていく
- 感じたことを言葉にしてみよう（紙に1行だけ書く）
- 紙を集めること
- 今日のテーマを説明（五行詩をつくる）
- 集めた紙を適当に並べて眺んでみる（共同制作の詩）
- 共同だったものを今度は個人の作業へ

作品②

- 好きな作品を一つ選ぶ
- 思いついたことをメモする
- メモの中から言葉を選び五行に構成
- 作品の前で全員発表する
- まとめ

受講者感想（抜粋）

床に座って和やかな雰囲気

子どもたちが床に直に座り、和やかな雰囲気の中で自由に発言できているところがよかったです。五行詩だけでなく、思いついた思いやイメージをマップにするIMTの活用とか、発展的にとらえることができる感じた。

テーマ設定でなく手法の選択が問題

いずれの指導者も、鑑賞者（子どもたち）の感じたことをすくい上げるスキルの向上に努めてきたことがよくわかった。また、年代・学年別のプログラム作りにおいて留意すべきは、テーマ設定ではなく、あくまで手法の選択の問題であることが確認された。

子どもたちの変容

最初の頃の子どもたちの様子、だんだん交流してい



ねらい

作品を鑑賞して感じたこと、考えたことを、字数制限のない五行詩に表すプログラムです。まず、対話を交えながら1点の作品を全員で鑑賞し、浮かんだ言葉を一人一行、短冊に書き出します。5つの短冊をつないで五行詩をつくり、発表します。作品をよく見ること・考えること・表現することを楽しみ、グループ活動と個別制作を組み合わせることで、伝えることや認め合うことを体験してもらいたいと思います。

グループ「に」

向かい合い、何を想う

対象者：目黒区立第八中学校 2年生 20名
 指導者：松永かおり（目黒区立第八中学校教諭）
 作品① 2階作品全般
 作品② アントニー・ゴームリー『反映／思索』2000
 使用教材：ワークシート、鉛筆

活動のながれ

作品①

- 2階作品全般を自由に鑑賞
- 集まって気になる作品を発表（理由も）

作品②

- 屋外と屋内の両方から自由鑑賞
- 座って気づいたことを発表
- 作品に隠されたストーリーを想像してワークシートに記入
- ワークシートをもとに発表（指名）
- 発表の内容から発展させて作品情報を少し提示
- いろいろなとらえ方があることを評価
- 感想を書く

ねらい

この生徒たちは、つい先日まで「自己を見つめる」というテーマに基づいて自画像を制作していたところです。作品制作を通して、思春期、自己形成の時期にある自分との対話を大切にすることを学びました。さて、そのような生徒たちが今回初めてこの「抽象的な向かい合う像」に出



会います。彼らはこの像をどのように受けとめ、感じ、そして表現するでしょうか？ 生徒の作品との出会いや発想を大切にしながら鑑賞活動を行っていきます。

受講者感想（抜粋）

多様なつぶやき

まず、生徒の作品を見るまなざし（の素直さ）が印象に残りました。次に先生の発問に対して出てくるつぶやきが多様で興味深く見ることができました。そのつぶやきをひろいあげる先生の手腕も素晴らしい、学ばせようとする姿勢を強く感じました。ゴームリーを選ぶこと自体が中学生にとって意味があると感じました。ギャラリートークをみる研修が、今後も多く企画されることを願っています。

題材選びと受容の姿勢

何を題材にして子どもたちと対話をするかが大事なのがよくわかった。松永氏が選ばれたアントニー・ゴームリーは私も一目見てほれこんでしました。意外性というか不思議さというか、向かい合った2つの像が多くることを語りかけてきそうです。子どもたち一人ひとりの意見を受容することで、子どもたちは伸びやかに、そしてイキイキとした表情で発表していました。何を題材とするかという視点、そして受容する姿勢が大変勉強になりました。

Group work

グループ「ほ」

お洒落で粋な日本人

対象者：埼玉大学教育学部附属中学校 9名

さいたま市立土呂中学校 4名
坂戸市立住吉中学校 17名

指導者：山田一文（埼玉大学教育学部附属中学校教諭）

作品① 伊東深水『露』1931

作品② 同じエリアから生徒が選んだ作品

使用教材：中学校国語便覧



活動のながれ

いろいろな作品を名前をつけながら歩く

作品①

1. 空間の特徴について意見を述べさせる
「日本らしい」「着物をきている」など
2. じっくり作品を見る
3. 小グループに分かれ、さらにじっくり見る
4. 気づきを発表（花の名前→季節は秋）
5. 見えているもの→見えないものへの気づきへ
6. 登場人物の関係性へ
7. 絵の気になったところ（ストーリー）をワークシートに書き、発表
8. まとめ（日本画には影がない話など）

ねらい

日本人でよかったと思えることを期待したギャラリートークです。前半は課題とする鑑賞作品で起こったできごとを推理する楽しさを味わうとともに、国語の資料を活用して季節の草花や着物の意味などをヒントに深く読み込み、お洒落で粋な日本人の心遣いや感性を感じることを目指します。後半は同じエリアの作品をグループで鑑賞し、発見や感動したことを発表してもらいます。



受講者感想（抜粋）

かくされたストーリー

一つの作品をみんなで見合い、感じたことを様々な観点から出し合うことで、いろいろな見方ができるとてもよいと思う。指導者が、「この作品にはどんなストーリーがかくされているか、かくされたストーリーを想像しよう」と投げかけていたが、とても参考になった。中学生はあまり積極的に発見はないが、ワークシートにはとても真剣に書いていた。

日本画のもつ線や色彩にも

ウォールケース内に並ぶ日本画の雰囲気について一言触れてから本題に入り、生徒の意見と発展的に進めていく指導は素晴らしいと思いました。ねらいのように推理する楽しさを味わうことができたと思います。

日本画については、指導者・生徒間で自然（花）に目を向したことと、最後に指導者の発した「日本の絵には影がない」という点でした。これまでの経過

はわかりませんが、日本画のもつ線や色彩、意図する構図など、魅力を引き出す要素にも触れていました。「鑑賞は自分なりの…」とは思います。

ワークシートに書かせる活動は必要

参考にしたいと思ったのは、今日のめあてをきちんと示したこと（今日は作品をじっくり見ていきます）。「描かれているものは何か」「最初に気になったことは何か」など指名を通してうまく発言させていた。子どもたちの発言が意図した方向にいかない場面もあったが、子どもたち自身の言葉を使い、バランスをとりながらうまくまとめていた。まとめの段階で教師が必要な情報（着物の意味、日本画の特徴など）を与えて、子どもたちの今後の鑑賞に生かせる方向づけをしていったことがよかったです。話し合いのルールや発表の仕方は事前に確認する時間はあったのかどうか？

グループワーク

目的は「交流」と「話し合い」

研修全体の約半分の時間が、ワークショップ形式で行なうグループワークにあてられた。AからDまでが小学校教員+指導主事+学芸員のグループ、EからIまでが中学校教員+指導主事+学芸員のグループで、それぞれにファシリテーター（進行役）と記録係（進行補助）がスタッフとして配置された。

目的と方法については、研修の1ヵ月前に開かれたスタッフミーティングで、次のように確認された。グループワークの目的は、立場や経験の異なる受講者同士の「交流」であり、交流からめざすべき鑑賞の姿を討議すること。そのための方法として、美術館という空間を最大限に利用し、①課題作品をじっくりと鑑賞する→②鑑賞の意義を共有する→③具体的な鑑賞プログラムを考えつつ、連携に向けての課題について話し合うこと。

進行の手法はファシリテーターに委ねられたので、実際にはさまざまな方法でグループワークは行われた。そして、2日間7時間以上にわたり、共に悩み考えながらつくり上げられた鑑賞プログラム案が、3日目に発表された。

ファシリテーターと記録係には、国立美術館の担当研究員はもちろん、「国立美術館の教育普及等に関する委員会」委員である教員などがあたるほか、大学教員、学芸員、インターンの協力を得ることができた。グループワークに使用した機材等については、技術チームの専門的なサポートを受けた。

■ Data

課題作品 清水登之『街の掃除夫』

1925

受講者 16名

構成 小学校教員 9名

指導主事 3名

学芸員 4名

ファシリテーター 西村徳行

記録係 赤崎陽子、広瀬晶子

■ 1日目ながれ

①作品鑑賞（気づきをメモ）

↓

②テーマ、目的の説明

↓

③自己紹介（作品について語る）

↓

④15分間作品観察→ワークシート記入

↓

⑤作品について意見交換

↓

⑥授業化を視野に入れた討議

↓

⑦まとめ

↓



8月6日（1日目）

「」はファシリテーターからの発言

①作品を鑑賞

子どもの気持ちになって作品について気がついたことを書く
→作品の前に置く

②テーマ、目的の説明

「テーマは“仲良く”」
「ホームグラウンドにもどった時に今回学んだことを実施してほしい。今回培ったネットワークを大切に保ち、利用していくほしい」

③一人ひとり自己紹介、作品について気がついたことを発表

どういう絵を使って、どのように使って、どのような子どもを育てたいのか？

④15分間じっくりと作品を観察

発見したことをワークシートに書く

⑤作品について意見交換

- ・パリを象徴する建物などがある
- ・掃除している人は鉄道員？向こうに見えるのは線路？
- ・1925年にメトロがあったのか？
- ・中央左の男の目がうつる。雇い主と雇われている人。飼い主と犬。
- ・対応している（その関係が赤い色で表されている）
- ・移民の多いフランス。階級差別などを表しているのではないか？
- ・二人の表情は厳しい。二人は視線を合わせているように見えて、実は目を合わせにくそうにしているように見える
- ・家族構成に関しては、右の男と左の男は同じ生活水準ではないはず。左の男は裕福な人ではないはず

■ ファシリテーター紹介

西村徳行 筑波大学附属小学校教諭

東京国立近代美術館の子どものための鑑賞教室をお手伝いすることになったのが、鑑賞教育と関わるきっかけ。最初は作品解説することが鑑賞教育だと思っていたが、子どもたちと対話する中で、子どもが独自の見方や考え方、感じ方で対象と接し、鑑賞することの大切さを感じる。
以後、自校の子どもたちを連れて美術館に行くことを続けている。よく行く美術館は東京国立近代美術館。

- ・小学5年だったら…犬は上から見下ろした視点から描かれているが、シスターに関しては違う
- ・シスターの服の色は中世ならば、位を表していた。この頃もそうだったとするならば、どうなのか？
- ・煙突は紡績工場のもの？ メトロは近代の象徴。労働者の働きによって近代が実現したことが表されているのではないか
- ・犬を飼うということはいつから行われていたか？
- ・裕福な人と裕福な人のために働く人

⑥授業化を視野に入れた討議

- 「子どもに対して最初にどのような声をかけるか？どういう質問をして、どういう答えが出てくるかを想定してみてください」
- ・思うことを根拠をもって言語化することが大事ではないか
 - ・作品から自分たちの物語をつくり上げられればよいのではないか
 - ・自由な発想で接する。発想を膨らませることが大事
 - ・調べてみたいという欲求、自分なりの意味を見出す。他者の意見を聞くことによって、さらに自分の意見を展開してゆく
 - ・キャッシュで大切なのは、どのようにして観覧者の興味を引き出すか？ 自分なりの解釈を生み出すきっかけとなるような、鑑賞の手助けとなるキャッシュをつくることが大事。提供する情報によって発想の展開を狭めないことが重要
 - ・大人の感覚では表題に引っ張られる。情報が少ないと疑問も広がってよい
 - ・情報に狭められない自由な観覧はよいが、ある程度情報を得ることによって、さらに発想を展開できることもある。要はバランスではないか

⑦まとめ

方向性としては、発想を大きく展開していくこと。具体的には、根拠をもって話をする。必要な際には、適当な情報を提供する

■ 課題作品を選んだ理由

子どもたちが自分の生活や体験を重ね合わせながら対象を見ることができるよう、①人物が描かれているもの、②街が描かれているものとして清水登之の『街の掃除夫』を選んだ。テーマは「探検鑑賞」。鑑賞する中で、絵に描かれた人やものを一つひとつじっくりと眺めていると、そこには不意に空気や風の感触、また匂いなど、実際に描かれていないはずのものが感じられることがある。さまざまな見方・考え方で作品に接することを楽しみながら、子どもがまるで絵の中に入っていくような感覚を味わえる、探検するような鑑賞活動ができるのではないかと考え、この作品を選びました。（西村徳行）

■ 受講者感想（1日目）

まるでギャラリートークのようみんなで作品について語り合うきっかけを自然につくれたファシリテーターのお陰で、たくさんの意見が出て有意義だった。また、ファシリテーターの温かい雰囲気と、決して方向づけない司会（参加者にゆだねる大きさ）で誰もが発言しやすく、まるでギャラリートークをしてもらっているようだった（指導案検討時も含めて）。人数が多いので、まだ十分に交流できていないが、この3日間で仲良くなれ、笑顔で解散できるような気がする。

どの方向に向かえばいいのか各自いろいろ語れる作品であったと思う。ただ順番としてはどうだっただろうか。一つの風景としての絵からシールドアリズムの表現へというつながれの方がよかったです。子どもの視点で作品を見るのか、子どもに作品を提示する側の立場として見るのがわかりにくく、どの方向に向かえばいいのか少し曖昧だった。グループの雰囲気はよかったです。それぞれの立場で感じたことを述べられたのではないだろうか。



1日目に使用したワークシート

■ 2日目のながれ

① 4人×4班で指導案を討議

↓

② 中間グループ発表

↓

③ 最終グループ発表（2案に絞る）

↓

④ 発表について決める



4人グループで話し合う



昨日のワークシートも貴重な資料に



全員の配役決め。一人ずつ役が決まるごとに拍手が沸き起こる

8月7日（2日目）

① 4人ずつ4つの班に分けて指導案を出し合い、話し合う

② 中間グループ発表

● 1班

- ・能動的な鑑賞になるように
- ・作品を深く読み解く機会ができるべきではないか
- ・作品に関するさまざまな見方を養うことが大切
- やり方として…
- ・「われら〇〇劇団員」
- ・子どもたちは作品の写真、穴埋め式の台本、ワークシートのみが入った封筒を受け取る
- ・ワークシートなどに記入してもらう
- ・与える情報、考えさせる情報にあらかじめ分けておく、など

● 2班

- ・作品の主題について考えてもよいのではないか
- ・絵を楽しく見て、この後、美術館に行きたくなるようにしたい
- ・絵に合う音、BGM、音楽を考えるという案。→でも難しい
- ・劇をつくる

● 3班

- ・連携について話し合った
- ・まず地域の美術館との連携を考えなくてはならない
- ・税金によって成り立っている展示。学芸員は作品の選定、配列の順番などにもこだわっているのだから、そこにも意味があることがわかってほしい。わかるのも、学芸員の仕事。学芸員との密な連携が必要となる。事前に十分な話し合いをすべきだろう

■ 指導者研修の記録係を終えて

赤崎陽子 東京国立近代美術館フィルムセンター研究員

印象的だったのはやはり、研修の参加者の方々の熱意ではないでしょうか。学校の先生方がそれぞれの意見の相違にもかかわらず、根底では美術教材と子どもと先生との間に何らかのつながりを見出すことへの熱意を分かち合っておられることをあらためて実感いたしました。

- ・学校側は積極的に作品を使っていかなくてはならない。地元にあるものをきちんと守る場をもつべき。アートカードなどの積極的な利用が必要
- ・学校の鑑賞活動に、学芸員の協力があるとよい。その鑑賞活動が、保護者にも影響を与えるものであるべきではないか

● 4班

- ・教える側は作品についての情報を知っておくべきではないか子どもの意見をきちんと拾える状態にしておくべきではないか
- ・体験的なものを取り入れたい
- ・白黒の絵にして、それに色塗りしてもらう。ヒントを与える「この中にきれいな緑色と赤色があるけどどこに塗るか？」
- ・劇がいい
- ・具体的にどういう絵なのか。楽しい絵？ 暗い絵？
- ・いろいろな意見が出ることの大変さを体感してもらう

③ 最終グループ発表

発表方法について

案1

説明係：どういった指導をするのか説明

教室の再現：先生1人、学芸員1人、生徒7人

まず説明、その後実際授業をしている場面を見せ、最後にどういった連携がされているかを見せて締めくくる

案2

学芸員と先生のやり取りの後、教室での指導

④ 発表について決める

寸劇班、連携について用意する班に分かれ、15分間準備をする。
最終的には全員で劇化。配役を打ち合わせ

■ 受講者感想（2日目）

参加者同士が協調し合えた

活動で印象的だったのは、同じグループの参加者同士が協調し合えたことである。教師と子どもたちとの関係もそうであるが、共に学ぶ喜びを実感し、分かち合い、悩みながらつくり上げていく中に「心のつながり」が生まれるのだとあらためて感じた。特にプログラムづくりについての話し合いでは、熱く互いの思いをぶつけ合うことができ、私自身、よい刺激になった。学ぶことに対する貪欲なまでの意欲をもつことが大切だということを感じた。今後、研修で学んだことを生かしながら自分が、そして子どもたちが納得できるような鑑賞教育の実践に努めていきたい。

スムーズに

一日目の絵画の鑑賞会では、1枚の絵について様々な意見が出た。それらの話し合いを受けての授業づくりであったので、一日目の意見が生かされていた。特に私のいたグループでは、みんな前向きな人達ばかりだったのか（？）積極的に意見が出された。他のグループの絵を見た時に、我々の班は人物が目立っているように思われた。よって、吹き出しにしたり、劇化をする方向で話がまとまっていた。それを持ち寄り、話し合った結果、スムーズに話がまとまっていったように思われる。

三者の連携が不可欠

今回は、教員（実際に授業するもの）、学芸員（美術の専門家）、指導主事（行政）の三者で作成できたというのが大変大きかったと思う。美術館と連携した授業の創造では、この三者の連携が不可欠だと感じた。

■3日目（発表）のながれ

①3日間のまとめ（司会2名）
↓

②連携（先生と学芸員のやりとり）
↓

③題材名、ながれの説明
↓

④劇化
↓

⑤まとめ（司会）



清水登之『街の清掃夫』1925



司会の2人が登場



先生と学芸員の連携場面



課題『街の掃除夫』の登場人物になって作品を劇化

■ファシリテーター報告

今年のグループワークでは、まずははじめにグループの課題作品をみんなと一緒に鑑賞しました。そしてみたり感じたり考えたりしたことについて、作品を前に、自己紹介を兼ねて一人ひとり発表していただくことにしました。今年の参加者の方々の印象は、大変意欲的で、鑑賞活動に課題意識をもって参加されている方が多いということです。この点については、他のファシリテーターの方からも同じような発言をお聞きしました。グループの人数が多いことからも、一人ひとりにご発言いただくと大変時間がかかりますが、グループでの課題意識を共有するという上でも、この時間は大変大切であるなと感じました。グループワークの主な目標は、課題作品を使った鑑賞の題材開発ですが、その場で考え方を発言していくだけでは、なかなか話が進まず、また内容も深められません。そこで今年は「宿題」という形で課題作品への切り口を、一人ひとりに考えてきてもらう

ことにしました。あまり負担にならない程度にお願いしました。2日目は班を4つの班（1班4人）に分けましたが、これは昨年の反省からです。昨年は参加者一人ひとりにご発言いただき、それを私が中心となってまとめていくというものでしたが、しかしそれではグループとしての話を深めることができませんでした。そこで今年のグループワークでは、まずなによりも参加者同士がしっかりと「語り合える」ように、場のもち方などを考えながらグループワークを行うことにしました。4人1班にしたのはちょうどよい人数であったと思います。全体での話し合いを数回もち、3日目の発表を見据えて題材の検討を行うことで、今年は班の中での活発な対話がなされました。来年への課題としては、最後に各班の中で検討されたことをどのようにして共有するかという点にあります。時間的に制約があることからも難しくはありますが、来年への課題としたいと思います。（西村篤行）

■対象 小学校高学年

■題材名
「手がかりは一枚の絵 我等は○○人の劇団員」

■ねらい
登場人物に着目させ、セリフを考えストーリー化することで、受身の鑑賞から主体的な鑑賞へ。一枚の絵の鑑賞を通して、いろいろな美術作品への興味を広げる。

■連携

学芸員は子どもの疑問に答える支援を

■ながれ

先生と学芸員で事前打合せを行う。先生は鑑賞授業の目的（ねらい）、美術館側にしてほしいことなどを学芸員に伝える。学芸員は対応を考える。実際の鑑賞では、作品を見た後、ワークシート（絵のコピーに吹き出しをつけた）を用い、グループで登場人物のセリフを決めストーリー化（共同制作）し、発表する。

■劇化の例

レポーター：「1925年くらいかな。いろいろな会話が聞こえますね。ちょっと聞いてみましょう」

シスター：「ボチや、6時になったら礼拝が始まるから帰りますよ」

犬：「おなかがすいたワン！」

後向きの女性：「パリの街は野良猫がいっぱいいるわ」

長身の男：「ポンジュール ムッシュマリオ。全然ヒゲが似合ってないぜ」

ひげの男：「ノノノノン、ピエール。これをとったらマリオじゃなくなるからなあ。今日も疲れた。飲みにでも行くかな？」

長身の男：「そうだなー。おごってくれよ」

後方の掃除夫：「ピエール、マリオ、まだこっちの仕事が終わってないっしょ。どうして行っちゃうのー。なまら悲しい～」

■講評

三浦：美術館が劇団を組織して先生の研修会に上演していただけたらなる思います（笑）。見ていて感じたことですが、身体で表現する場合、身体を動かした時に生じる言葉にならない感覚というのがあって、演じることを目的にしてしまうとなかなか自覺するまでたどり着けない。演じながら、その感覚を大切にするといいなと思います。

■Data

課題作品 元永定正「作品 66-1」

1966

受講者 16名

構成 小学校教員 10名

指導主事 2名

学芸員 4名

ファシリテーター 柴崎 裕

記録係 齊藤佳代

■1日目ながれ

①自己紹介

↓

②課題説明

↓

③鑑賞→どんな感じか一言で

↓

④さらに考察を深める

↓

⑤絵本の紹介

↓

⑥ファシリテーター提案

↓

⑦プログラムについて全体討議

8月6日(1日目)

「 」はファシリテーターからの発言

①自己紹介

自身の活動、問題意識、課題などを中心に

②課題説明

「お互い意見を出し合ってわからないところがあったら確認しながら、進めましょう。最終的に一本のプログラムに」

- ・対話型ギャラリートークについて
- (アメリア・アレナスについて簡単に説明)

③しばらく自由に作品を鑑賞する

どんな感じか一言で

- ・こわいかんじ、目玉が大きい、くろくてわーっと
- ・生き物が吐き出しているかんじ、ぱっくり口が開いている
- ・唐辛子たくさん。真ん中が一番からそう！
- ・色がたくさんあってカラフル！
- ・それぞれの人生をあらわしている燐燐

④さらに作品を見ながら考察を深める

- ・どこから描き始めたのかな。柱の部分をたらすのが最初かな
- ・全体的に流れた感じから混沌をかんじるが、はっきりとした搖ぎ無いものが、芯がある、柱一本一本に個性を感じる。全体のイメージはゆらゆら、混沌。その中にある本質を主張
- ・動的、静の両方がある
- ・上の楕円がなんだかいやな感じ「うえー」と腰を出すような

⑤絵本の紹介

本人とのインタビューより、意外に子どもたちに受け入れられることに対する作者の驚きを紹介

⑥ファシリテーター提案

- 「この作品を使って遊びを考えたい」
- ・丸いところに好きな顔を描いていく
- ・切り取って並べ替えたり
- ・一本一本に生き物を考えて名前をつけていく
- ・だば君が地面から出てきて何かを噴出しました。くろ君がピッ！」

⑦プログラムについて全体討議(終了まで討議)

「この作品でできることは？」

- ・プログラム構築の方法論骨組みの紹介
- ・4つのキーワード紹介(ねらい、ながれ、子どものとらえ方、こんな連携がしてみたい) ファシリテーターが材料になって提案したが、その後はだんだんフェイドアウトする形
- 「4つのキーワードにとらわれることなく、話しやすいところから始めましょう」
- ・学校に持ちかえるプログラムではなく、作品の前で行えるもの
- ・そのときそのときの目標。どう感じてほしいのか、を話し合っていくと何かがみえてくるのでは
- ・みるとあって楽しいことだったんだ、いろいろな考えをもってもいいのだ、と子どもが実感するようなことになれば
- ・絵について最終的に言葉で表現してみる
- ・言葉を気楽に発してよいのだ、という雰囲気をつくる努力をしなければ

■受講者感想(1日目)

意図がわかりやすい

ファシリテーターの意図がわかりやすかった。全国の方々の考えが様々で興味深く、自分のスタンスに重ね合わせ、いろいろと考えることがあった。どんなプログラムができるか楽しみ。

「この作品で」の一言

「元永定正、抽象的、わかりにくい…」と一瞬思ったが、メンバーがそれの意見を言うのには、よい作品だと思う。ファシリテーターの鑑賞における考え方が揺れ動いていない点がいいと思う。学校と美術館の連携が気になり、つい授業や学校現場の話になりがちだが、ファシリテーターの「この作品で」の一言で、グループ内の話が動いていったように思う。

人数は半数くらいがまとまりやすい互いに認め合おうという気持ちはあるのだが、ギャラリートークの対象が15人程度ということとグループワークでの15人は異なるものだと思う。一人ひとりが経験豊富で、理論派の方も多い集団となっているので、この半数くらいのグループの方がまとまりやすいと思った。

■ファシリテーター紹介

柴崎 裕 多摩市立多摩第三小学校图画工作専科教諭・東京都图画工作研究会

国立西洋美術館と東京都图画工作研究会の連携は1995年の子ども向けガイドブック作成に遡る。2003年には共同で教員研修の場を立ち上げ、以降毎年この研修会を実施している。現在では東京国立近代美術館、東京都現代美術館の教育普及担当者を交え、公開授業を行うなど鑑賞授業の様々な可能性を探っている。多摩市立多摩第三小学校では、2002年より学区内にあるパルテノン多摩と連携しながら、「作家とのコラボレーション授業+鑑賞」実践に取り組んでいる。これまでに開発好明氏(2003)、江田 豊氏(2004)、清 真美氏(2005)、小川照夫氏(2006)の協力を得た。



■課題作品を選んだ理由

近代以降、美術が目指してきた作品観(テクスト論)として「開かれた作品」への展開がある。芸術を「作品の中に込められた自明の価値」としてとらえるのではなく、「観者と芸術との関係性」としてとらえ、観者の意味生成に委ねていく。ここでは作品を作家の意図として解釈しようとするのではなく、観者が「作品」とコミュニケーションすることが重要になるが、元永定正の「作品 66-1」は、そのような作品との関係性を端的に求めているように思える。作品は一般的には抽象画に分類されるのだろうが、どこか生物を連想させ、動きがあり、かわいらしく奇妙だ。「わかりやすく、わかりにくい」両義的、根源的な問いかけをもっている。そして元永は自分の制作や作品について「具体」の仲間とも議論はしない、「話したら負けや」「絵は絵やん」と谷川俊太郎とのトーク(2006年練馬区立美術館)で明らかにしている。グループワークで扱うことは、このような姿勢に貫かれた作家の姿勢から、より「主体的に美術との関係性」を喚起することができ、さらにこの作品を使って「遊ぶことができるか」という提案が可能であると考えた。(柴崎 裕)

■ 2日目のながれ

① 昨日のふりかえり

↓

② 4班に分けてプログラムづくり

↓

③ 各班のプレゼンテーション

↓

④ 全体トーク

↓

⑤ 3日目の発表のすり合わせ

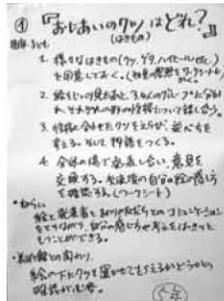


Bグループ全体

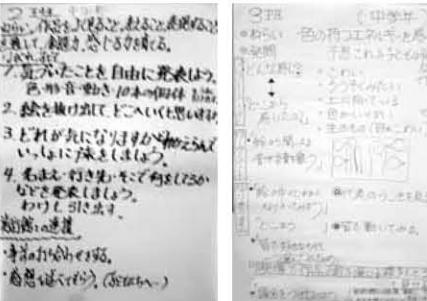


3班のプレゼンテーション場面

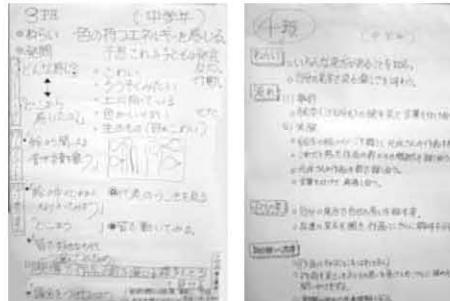
プレゼンテーション資料



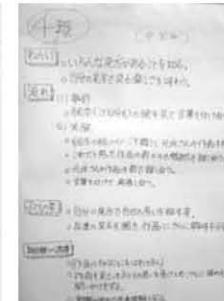
1班



2班



3班



4班

8月7日(2日目)

① 昨日のふりかえり (昨日の話し合いの中で出た言葉の抜粋を紹介)

- ・身体表現によるプレゼンテーション
- ・絵をいかに解釈するかではなく、自分がいかに表現するか
- ・プログラムがどんな形であれ、そこに至るまでの交流が重要
- ・美術館という環境の中だからこそ、できること
- ・気軽に言葉を発することができる雰囲気づくりの重要性

② 4班に分けて各班で1つずつプログラムづくり

- ・リーダー選出 (進行役はファシリテーター→リーダーへ)
- ・4つのキーワード (ねらい、ながれ、子どものとらえ方、連携)
- ・班ごとのディスカッション (紙にマジックでまとめる)

③ 各班のプレゼンテーション

1班 「もの」を介在させたやりとり

靴の置き方を解して並べ方、靴の選定などに性格が出るはず (柱から得たイメージとのつながり)

2班 10本の固体を自分の分身として

動き→旅→絵をぬけだしてどこにいくか?

原始的な生命などへのつながりや生命力 (具体との関連の中で)

3班 全体と部分の対比

題名をつけ言語化する。そうすることで、その日に感じたことがまとまってあらわされるはず

4班 言葉をつける作業

絵本を字のない状態で子どもたちにみせる

学芸員による子どもたちの言葉の引き出し、受け入れ



④ 全体トーク

各プログラムについての分析をする中で、各プログラムの特性、利点を検討、それぞれの持つ課題が確認できた。

元永作品ならではの作品鑑賞プログラムの骨子として1班提案の「おにあいのクツはどれ?」を取り上げることとした。

⑤ 3日目の発表のすり合わせ

発表の準備

【プログラム構築の背景】

色やかたちの性格や特徴を自分なりに感じ、意見や考えを述べたり、かたちにあらわしたりする

- ・作品鑑賞からさまざまなお見がし出る可能性に着目
- ・色、かたち、動きなど見る視点や子どもが感じ取った絵の要素に気づかせながら、作品から感じることをコミュニケーションの題材とする
- ・色の躍動感を感じて、感じつつ、その絵の前であそぶ
- ・色のエネルギーを感じ、靴をつかって表現を試みる
- ・作品と発表者とまわりの友達とのコミュニケーションをとりながら、自分の感じ方や考え方をはっきりもつことができる (コミュニケーションをとるための作品の存在)

・作品をよくみるとこと、考えること、

表現することを通じ創造力、感じ
じる力を育てる

- ・色のもつエネルギーを感じる
(+表現)

- ・いろいろな見方があることを知る
- ・自分の見方で見る楽しさを味わう

- ・直感的にかぎったものを、表現
を通じて形にしたり、他者と共有したりする

・自分が感じたことの反映、友達との意見の交換

元永作品ならではの要素

- ・絵の見方を強制しない
- ・色のものつエネルギーを感じる
- ・直感的に感じることこそが元永
- ・作品を鑑賞する意義につながる
- ・「絵は絵やん!」(元永本人の言葉)

■ 記録係から

齊藤佳代 東京国立近代美術館工芸課事務補佐員

記録係として参加して強く感じたのは、参加者間での課題の共有からグループワークを始めたことが、グループBの研修をより充実させたのではないかということである。鑑賞教育に対する日頃の取組みの中で各人が抱いていたる疑問や課題を、自己紹介を通じて情報交換することにより、プログラムを構築するために必要な共通認識を、最初の段階で得ることができたようだった。これは各参加者が、具体的な成果を求めて研修に参加していたからこそその成果だろう。また、グループワーク全体を通じて活発な意見交換が行われていたのも印象的だった。小グループに分かれてつくった4つのアイデアについて、その発展の可能性や問題点を論議する過程を通じて1つのプログラムを仕上げたのだが、多角的な視野から検証するこれらの作業は、討論が尽きることはなかった。グループワークにおけるこの思考のやりとりこそが、本研修における最大の収穫だったのではないだろうかと思う。

■ 受講者感想 (2日目)

様々な発想にユニークさ

4つの班から鑑賞プログラムの案が出されて、様々な発想にユニークさがあり楽しかった。自分一人では考えつかないアイデア、見方が各班の中で交流ができたことがとても有意義であった。学芸員側と教師側の意見が交わされているところは、特に新鮮で楽しかった。ある作者の作品を美術館に探す活動は異色で、大きな問題を提示できそうな面白いプロジェクトだった。

子どもの感じる力・考える力

4班に分かれ仮プログラムを4つ提示したが、作品を導入にして行うプログラムだけでなく、子どもが楽しむことを前提にした比較的自由なプログラムなども提示されていたのが印象的であった。私は美術館側なので、考える視点も絵の理解を深めるものになってしまいがちだった。絵について理解を深めることよりも、子どもの感じる力・考える力を養うことにも重点を置くべきだと感じた。

8月8日（3日目）

■3日目（発表）のながれ

- ①次点3案の紹介（司会）
↓
- ②採用案の報告（1班リーダー）
↓
- ③実際の授業場面（全員）
↓
- ④まとめ（1班リーダー）



ねらいの説明



授業が始まったところ



実際の授業場面

■ファシリテーター報告

昨年度、本年度と2回のファシリテーターを努め、気がつく点について述べる。研修受講生が教師、美術館学芸員、指導主事という3者による構成がファシリテート上の大きな課題となる。研修内容や議論の行方は、この3者によって見え方が違い、常にその点を意識することが必要だった。研修内容を方向づけるフォーマットが、指導案となっていることで、課題のわかりやすさとわかりにくさを同時に抱え込むことになった。「指導案」は教師にとって日常的だが、記述上「テクニカルターム」が多用される。これが最終的な発表の形式となることによって、議論が「語法」の問題へと転化する傾向を生む。昨年度は初めてのこともあり、この「語法」の問題が最終的に焦点化した。つまり学芸員から見たとき議論をフォローするのが困難な事態を生んだ。このことは職域を越えて理解される連携上の課題であることに違いないが、美術館という場で「語法」を議論す

ることにジレンマを感じた。

本年度はファシリテートの視点を「授業づくりの着眼点」、「子どもと作品」をどう出会わすべきか?という展開部のバリエーションを中心にが行くようコントロールしたいと考えた。この点についてはグループをさらに4つに分け、プログラムづくりに取り組んだことが有効に働いた。プレゼン時に、関心を集め、焦点化したのがやはり「展開部」だったからである。やはりプログラムづくりで3者がエストとし、研修内容として優先順位を高くするものは「展開部」と言えそうである。ここには教師の「子ども性」の知見と、学芸員の作品情報や、作品と観衆の反応など経験的な知見がクロスする部分がある。さらに美術館という場所性、フロアー他作品との関連などに受講生の意識が向くことになった。今後、ファシリテートの経験を交流させ、フォーマットの見直し、時間の組み方、終末段階のファシリテーターの在り方などに、方法論の骨格を見い出すことができればと考える。（柴崎 裕）

鑑賞プログラム案

■対象 小学校5年生

■題材名
「おにあいのクツはどれ?」(1班)

■ねらい

色やかたちとのかかわり合いの中から、イメージをひろげ、話を考えたり、表現したりすることができる

■ながれ

- ①事前の準備（様々なはきものを用意する）
- ②教師のなげかけ
- ③気づいたことを自由に発表→話し合う
- ④形に名前をつける、性格を考える
- ⑤靴を使って構成したり、表現したりする
- ⑥発表を通じて他者の表現に触れ、受け入れる

■子どものとらえ方

- ・子どもたち同士がどうかかわり合って表現につなげたか
- ・絵の要素（色やかたちなど）を発言の言葉に入れながら、作品と自分の表現を比較しながら工夫しているか
- ・靴の選び方、並べ方、性格づけから子どもが作品から何を感じ取ったか

■こんな連携がしてみたい

- ・美術館に事前に確認（作品の前に靴を並べること）
- ・キャッシュオンを雇すことの許諾（来館者への配慮）
- ・分散活動のため、子どもの言葉を拾う人員の確保
- ・支援、作品保護の観点から美術館側の人員の確保



■講評

奥村：昨年も同じ絵でグループワークを行いましたが、一人ひとりこの絵と同じ色の色紙を頭に乗せて上下に動いたんですよ。今の発表と実は同じなんです。つまりこの絵を通して感覚と動き（行為）を引き出している。感覚とか行為とかそういうことがおそらく達成されている。それはもしかすると元永さんの意図に重なるのでは、といふことを感じました。

■Data

課題作品 土谷武 「開放！」 1997

受講者 15名

構成 小学校教員 9名

指導主事 2名

学芸員 4名

ファシリテーター 谷口幹也

記録係 弘中智子

■1日目ながれ

①リラックスを促す

↓

②作品を子どもになって鑑賞する

↓

③気づきを話す

↓

④気持ちのよい角度を探す（自己紹介）

↓

⑤身体で表わしてみる

↓

⑥3人一組で話し合う

↓

⑦班ごとにプログラムを考える

↓

⑧話し合った内容を報告



8月6日（1日目） 「 」はファシリテーターからの発言

①「心のネクタイをゆるめて、リラックスしましょう」 15:30 —
ファシリテーター自己紹介／グループワークの趣旨／スケジュール

②作品を子どもになって鑑賞する 15:45 —
・近づいてみる、覗き込む、離れてみる、声を響かせてみる etc.

③気づきを話す
・叩いてみたい→キャベツのようなたたいた跡を見て
・開いていくイメージ
・5枚しか板がないので1枚は飛んでしまったのではないか？



④気持ちのよい角度を探す 15:55 —
・作品の写真を1枚撮ってみる
・「ここが気持ちがよい場所だ！」の理由
→自己紹介 16:03 —



・縦の部分に小さい穴があいていて、光がもれることが楽しいのでこの場所が好き
・台風で飛んできたイメージ、安全そうな場所を選んだ

「心地よい、不安定の違いは何だろう？」
・不安定、ちょっと不安で冒険できる場所、この作品が音をたてて回転しながら空へ行く感じがする

■ファシリテーター紹介

谷口幹也 九州女子大学人間科学部人間発達学科専任講師

現代美術を視野に入れ、人とアートの出会い、アート教育の可能性について、現象論的な考察と教育実践の観点から研究を行っている。鑑賞教育に関しては、平成17年度より、鳴門教育大学・橋本泰幸教授を研究代表とするSoVAプロジェクト（科研費助成研究）にて、東京国立近代美術館、国立国際美術館の学芸員、大学研究者、現場教員と共に、美術館教育、鑑賞教育実践の課題と展望をめぐって研究を行っている。

まとめ

*一人で見るとこれだけの気づきはない
*対象と一緒になることはできないだろうか

⑤身体で表わしてみる 16:25 —

・できるだけ立場の違う人同士の構成に展示室の作品を見ながら他の作品と課題作品、空間との関係等を考える
・対象と一緒になるために、3人で身体を使った表現を考える
・班ごとに作品を発表する 16:45 —



⑥3人一組で話し合う 16:56 —

空間、作品、子ども、身体など

⑦班ごとにプログラムを考える 17:03 —

・自分の抱えている問題、子どもたちのこと
・やってみたい鑑賞教育、私たちにどんなことができるだろうか

⑧話し合った内容を報告 17:25 —

・この作品で何ができるかな？ 国語なら物語、音楽なら音で表現するなどすれば感覚でとらえられるのではないか？
・段ボール、紙で作品をつくる、金属質なものをつくってみる
・身体表現をしたいなあ
・美術館の中での活動（スケッチ、クイズを載せたワークシート）
・作品の鉄板の一枚がメッセージだとして言葉や絵で表現する

「明日はグループで作品を楽しむ方法をディスカッションしていきましょう」

■課題作品を選んだ理由

初見のときの印象が強かったので、この作品を選びました。どういった印象かというと、「これは、授業をする時難しそうだな…、だけど、だからこそオモシロイのではないか？」といったことです。私の判断の背景には、鑑賞教育の共同研究で一緒にしている先生の「子どもは不思議が大好き！」という言葉が印象に残っていたからかもしれません。私自身、これまで立体作品の鑑賞活動を行ったことがありませんでした。ですから、研修に参加する方々と同じスタート地点から、鑑賞方法や内容を考えることができるのではないか、できれば自分にとって未知の領域に踏み込める作品がよいだろうと考えた次第です。そして、作品が展示されていた空間そのものよさ、この空間ならば、参加者の方々と落ち着いて、作品や空間を楽しめるのではないかと思ったのも選んだ要因の一つです。（谷口幹也）

■受講者感想（1日目）

グループ全体で作品を共有
好きな場所を選び、座り、写真を撮り、理由を伝え、という個々の働きと、3人ずつのグループになって身体で表現し、他に伝え、写真で記録をとり、作品と一緒になるという小グループでの働きによって、グループ全体で作品を共有できたような雰囲気づくりをしてもらえた。

15人で見たときの気づきの価値や意義
「開放！」は、周りの空間を取り込んでしまう存在感の大きさと、それでいて周りの作品と調和している作品だと思った。また、素材の加工や構成、表面の様子が面白く、子どもたちにとっても、いろいろな発想を促される作品である。1人で見たときと違う、15人で見たときの気づきの価値や意義をファシリテーターは楽しい雰囲気の中で教えて下さった。

ダイナミズムという言葉が印象的
彫刻ということで、美術館以外の場所では鑑賞しづらいので、館内スペースを生かした活動、鑑賞後の学校での活動等、分けて考える必要があるのではと思った。ファシリテーターの方には雰囲気をつけていただき、子どもの視点で自分の鑑賞が行えたと思う。グループの他の方と交流を進めていく中で、様々な見方、感じ取り方があると思ったが、ファシリテーターの方の言うダイナミズムという言葉が印象的でした。

小・中が混在していてもよいのでは？
グループの雰囲気は大変でやかだったが、こういう場だからこそ、小・中の先生方が混在していてもよいのでは？ と感じた。

■ 2日目のながれ

①本日のスケジュールの確認

↓

②新しい班誕生！

↓

③付箋で頭の体操

↓

④班ごとに付箋をみんなで読む

↓

⑤班で出た意見を全体で討議

↓

⑥昨日の写真・ビデオ鑑賞会

↓

⑦班ごとに授業案を考える

↓

⑧班ごとのプレゼンテーション

↓

⑨班ごとにもう一度案を整理

↓

⑩どの案にするかを決める



付箋を使って思いつくまま書き出す受講者



班ごとのプレゼンテーション場面

54

8月7日（2日目）

①本日のスケジュールの確認 13:40 -

- *指導案的な観点が必要。わかりやすい言葉で指導案を考える
- *子どもたちが美術作品に入りやすい方法を考える
- *土谷作品をひとつの入り口にして考える
- *自分の抱えている問題について考える

②新しい班誕生！（前日の班を解体し、5人組×3班をつくる）

- ・班名をつける（A班キャンキャン、B班たまらだらー、C班ワイニー）

③付箋で頭の体操 14:06 -

- 1質問につき3分で思いつくまま書く
- 質問1. 子どもがかわいいな、かがやいているな、と思える場面
- *教育者として嬉しい部分、目標に近づいた時
- 質問2 自分が子どもに対して失敗したな、悪いことしちゃったな、と思える場面
- *自分の規範意識
- 質問3. 今、子どもたちに伝えたいこと、大切にしたいこと
- *教育者としての自分のテーマ、使命

④班ごとに付箋をみんなで読む 14:25 -

- 同じような内容のものを模造紙にまとめていく（例：子どもの表情のことだな）→どのような傾向、まとまりなのかを考える→キーワードを書く



■ Cグループ記録係が語る～笑いと刺激に満ち溢れた3日間～

弘中智子 板橋区立美術館学芸員

「心のネクタイ」をはずして作品や人々と正面から向き合う時間を大切にできたことがCグループの大きな収穫ではないか、と私は考えています。ファシリテーター、谷口さんは基本をこなしただけだとおっしゃっていましたが、心から楽しく進めることができたのは谷口さんの雰囲気に参加してくださった方々が素直に入り込めたからではないか、と思います。貸切になった展示室内で作品と作品を体現した参加者を見比べながらお腹がよじれるほどに笑い転げたことは忘れる事のできない経験の一つです。笑い声の絶えない議論の中心はしっかりと「作品」と「鑑賞者である子どもたち」でした。初日は体を使って作品について考え、2日目は模造紙を使って子ど

⑥班で出た意見を全体で討議 14:50 -

⑥昨日の写真・ビデオ鑑賞会 15:10 -



紙でつくったミニチュア

⑦班ごとに授業案を考える 15:30 -

⑧班ごとのプレゼンテーション 16:20 -

⑨班ごとにもう一度案を整理する 17:05 -

1つの案にまとめていく

⑩どの案にするかを決める 17:18 -

- 練り直した案をみんなで読んでみる
- 造形を基礎にするか、鑑賞を基礎にするか？

次点の2案

班名	ワイニー	キャンキャン（遙々）
■題材名	「シカクのナカミ」	「シカクのフシギ」
■対象	中学校3年生	小学校5、6年生
■ねらい	自分と向き合う 発見、価値感の広がり	
■ながれ	・平面・立体にこだわらず「中から出でていったもの」をつくる はじめ 対話型鑑賞 なかみ 表現を考える まとめ 美術館で発表をする	事前：シルエットクイズ→紙や板でミニチュアをつくる→「本物を見てみたい」 ・美術館へ行く
■子どものとらえ方	・進路選択の時期に自己を見つめ直す	
■こんな連携がしてみたい	・生徒作品の展示への協力 ・作家との対話	・芸能員（子どもが欲したごとについて応えてくれる役、情報源） ・作者、制作写真、素材もよい

もたちについて考えました。思いっきり動く、笑う、共感する、これらの行動は作品を楽しみ、そして人と人がつながる原動力になっていたように思います。今後のための問題点を指摘しておきます。まずは用意された「共通フォーマット」について。Cグループでは各項目を見ながら議論を進めましたが、項目に書ききれないものをどこに入れるか、の議論に時間を費やすのが惜しい、「子どものとらえ方」の「とらえ方」がわからないとの意見もありました。フォーマットを使う場合はグループ全員にわかるように抽象的な単語の説明が必要だと思われます。次にグループでの発表について。Cグループでは指導案を3つの小さな班に分けて作成しました。発表時間が5分となると1案に絞らなければなりません。せっかくのアイデアがグループ内で消滅してしまうのが惜しいと思います。発表時間の延長や、グループ内の細かな案を全て発表するという方法ではなく、他のグループでの議論を共有することができればと思います。

■受講者感想（2日目）

付箋

3つのテーマについて付箋に書いて言葉を出し合ったことが印象的だった。自然に各自の共通項が抽出され、かつ大切に思っている事（ここがポイント）が言葉で明確になり、次のプログラムづくりの根幹として、ほんやりとではあっても共有できている感覚をもてた。そのことにより、信頼して次のステップに進むことができた気がする。1人では考えつかない思いもよらない流れや、言葉を絞り出せたのではないか。「心のネクタイ」「ポストイット」「グループ名」それぞれのアイテムが成功グッズだったかな。

思考・議論に時間をかけたかった

実際の授業の時間設定を想定したためか、現実的なプログラムの案出が、かなり短時間でなされた。グループワークの時間内という枠が大きいと思う反面、すぐカタチになることをつくる行程の前段階の思考・議論により時間をかけたかった。

真に共有できる基盤の共通理解を

全国的な集まりの中で行われた会であるからこそ、メソッド、スキル的な部分の共有化ではなく、真に共有できる基盤的なものの共通理解を確認できれば充分であると思った。パラダイム論的に様々な教育理論が構成、形成される際、子どものある特定の反応ないしは一般的な傾向をどのようにとらえるか、そのこと自体大きな意味をもつ。様々な実証的所見が教育プログラムの形成に影響を及ぼすことを思うと、その解釈の問題を含め、諸データの取り扱いについて慎重な配慮が求められると思う。

8月8日（3日目）

■3日目（発表）のながれ

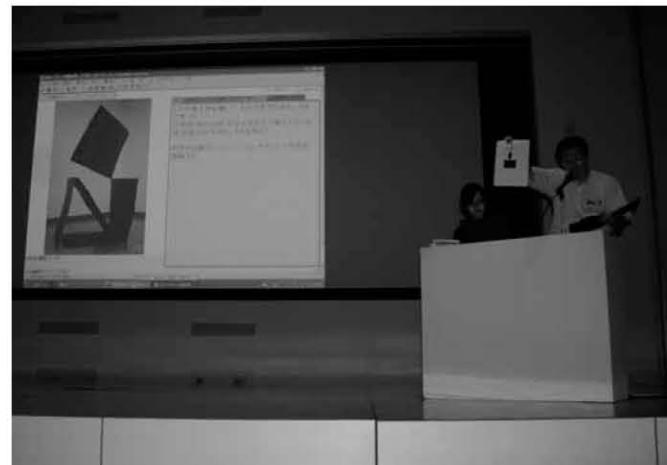
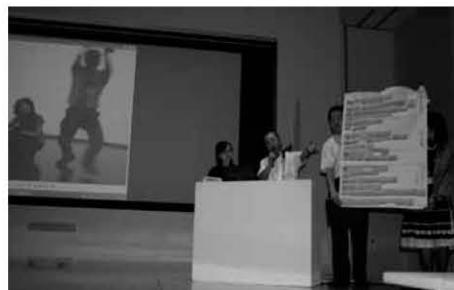
①2日間のプロセスの紹介

↓

②採用案の詳細報告（班の代表）

↓

③全体を通しての感想



発表者のひとこと

やっぱり皆でやらなあかん

今まで、実は惜しいところ手放してたなと思います。（鑑賞プログラムを）みんなでつくることがいかに楽しいことで、そしてこれを大事にすることが鑑賞を広め、深めていくということを実感しました。

■ファシリテーター報告

Cグループの活動テーマは、「交流」です。これは、突然浮かび上がった言葉ではありません。事前に開催されたスタッフミーティングにおいて確認された言葉です。私は研修会の目的を、教員・学芸員・指導主事が立場を越え、協力関係の重要性を実感することであると理解していました。

1日目、私はグループメンバー全員に対し、立場や肩書きを外し全員で鑑賞活動を楽しむことを提案しました。そして、対話型鑑賞を全員で体験し、よく「見る」こと、子どもの鑑賞の在り方の特性を体験できるよう、1人で→3人一組でと鑑賞のアプローチを変えました。その際、作品のおもしろさ、参

加者の気づきを全員で共有できるよう留意致しました。初日に奥村高明氏の講演が行われたことは、グループワークの進行上とても有効に作用したように思います。奥村氏が、「美術館」、「学校」の真ん中に「子ども」が存在していること、子どもの鑑賞の在り方のおもしろさとその重要性を明示したことによって、プログラムづくりの目的がより明確となりました。

2日目は、5人一組となり、付箋紙、模造紙を使用してKJ法を行い、立場を越え共有しうる「教育への想い」「子どもへの想い」を抽出することからスタートしました。この試みは、時間配分上、リスク一

鑑賞プログラム案

■対象：小学校3、4年生

■題材名：「シカクのキモチ」（たまらだら一班）

■ねらい

- ・ものの見え方を通して、ものの見方のおもしろさに気づく
- ・四角形（単純な形）を組み合わせて新たな形（立体）を生み出す楽しさを味わう
- ・作家の活動をシミュレーションすることで作品を理解する

■ながれ

- ①この影どんな形？（シルエットクイズ）
- ②5枚の□（しかく）からできているんだよ（ヒント）
- ③ミニミニくんをつくってみよう！！（持ち運べる大きさ）
- ④つくったあとに…タイトルをつけてみよう！
相互鑑賞・こんなにいろいろあるんだね
みんなで見てみよう・シルエットでも見てみよう（あ！似てる 似てる ちょっと違う？
ここは似てる）
「ひとつの影からこんなにできた！！！」
- ⑤○○美術館に本物があるんだよ
子どもたち：「いくいくー！みたいみたーい！」
教師：「みんなの作品はどうする？」

子どもたち：「もっていくー！」

⑥実際にやってみよう→対話型鑑賞？

1. 自分の作品と比べてみる、置いてみる?
表面のテクスチャーの違い、色、大きさ、素材の違いなど、気づきを出す

2. 学芸員さん・作家さんのお話「開放！」

「本物ってスゴイ！」

⑦学校に戻って…作品を少しふりかえって自分の作品をどうしたい?
(大きくしたい！ボコボコしたい！色をつけたい！もようをつけたい！別のものでつくりたい！)

⑧きみの「シカクのキモチ」を聞いてみよう（インタビュー）

⑨制作

⑩相互鑑賞、展示会（吹き出しをつけて飾ろう！）

■子どものとらえ方

- ・四角を組み合わせて、新しい形を子どもたちが楽しんで生み出そうとする。
- ・平面を組み合わせて立体を構成するおもしろさ、不思議さを味わうことができる。

■こんな連携がしてみたい

- ・学芸員、作家との対話（存命の場合）
- ・作者の制作風景、他の作品の写真の提示
- ・対話型鑑賞
- ・子どもたちの作品を持ち込んで比べてみる



■講評

長田：1日目のグループワークのプロセスの中で、身体を使って作品の形を見直すということを私も拝見したが、立体作品を身体表現に変えていくというのは、とても重要だとあらためて感じた。質問だが、身体的に体験的に再現する中で、この作品のテクスチャーはどんな風に問題になったか？

発表者：最初の気づきの中ではテクスチャーの話がいろいろ出たが、プログラムを考える段階で、構成の方に絞っていました。

グループワーク・D

■Data

課題作品 アントニー・ゴームリー

『反映／思索』 2000

受講者 16名

構成 小学校教員 10名

指導主事 2名

学芸員 4名

ファシリテーター 寺島洋子

記録係 鳥居 茜

■1日目ながれ

①自己紹介

↓

②ギャラリートークの感想・質疑応答

↓

③自由に作品を見る

↓

④全体で話し合う

↓

⑤どのような経緯で作品が設置されたか？

↓

⑥作品写真とゴームリーの作品の紹介記事配布

8月6日（1日目）

①自己紹介 15:35 -

②ギャラリートークの感想・質疑応答 15:55 -

③自由に作品を見る 16:35 -

5分ほど中から、外から自由に鑑賞する

④全体で話し合う 16:40 -

●作品をみて気になったこと、気づいたこと

・何をしているのだろう？向こうにいる人は誰なんだろう？なぜ裸なのか？なぜこのポーズなのか？

●次の瞬間どんなことをするだろうか？足に入っている力の具合から想像してみて→実際にこの像のポーズを真似てみる

・いざやってみると姿勢がつらい

・力を抜いて立っているようで、力が入っている

●外側から見たらどうか？印象はどう違うか？

・外の像は外気、風、音の中にあるので、現実感を感じる。室内の像は、空想の世界

●2体が向かい合わせであることで様々な解釈ができる。この2体の関係は？

・今日見ると、10年後とでは違う。外側は風雨にさらされて変化するので、印象が異なっていく

●自分としてどこからみるといいと思うか？

・外側から場所を変えて像をみてみる

・再び中に戻ってみる

・外で見た時とまた異なる印象があるので、見る場所がポイント

●中から見る方が好きな人は？

・外で見ると小さく見えたが、中から見ると像が大きく見える

・どちらからがいいかは決められない。ガラスであって、鏡では

ないということを強く意識する。それぞれの場所からみることで、両方の像の気持ちになりきることができる

●子どもがみたらどのようなことを言うか？

・のっぴらぼう

・近いところで向き合っているので、会話している内容を言うのではないか

・相手の方へ手を伸ばして向こう側に行こうとするアクションを起こすのでは

・違う環境の場所に同じ像があることで様々な想像を引き起こす

・選択肢によって異なる道を歩んだ二人の関係性

・使用前、使用後…

●もう一言何か言っておきたいことは

・目や鼻の口などがすべて閉じている

●すべての感覚が閉ざされている人物だとすると、何を感じられるか

⑤どのような経緯で作品が設置されたか？ 17:30 -

所蔵館の学芸員（一條）に聞く

・作家自身が美術館内を巡り、この場所に設置することを決めた
・重さ 600キロ。とても重いので床の木を剥ぎ、鉄板を置きコンクリートで固めて設置している

・鉄でできている

・素材は内、外同じもの

・自分の体から型をとっている

・設置後の2004年秋、各地に豪雨をもたらした2つの台風によって、テラス側に設置した1体に雨が当たり、赤く錆びてしまった。
作家に連絡すると、「それこそが自分の望んでいたことである」というコメントがあった

⑥作品写真とゴームリーの作品の紹介記事配布

■受講者感想（1日目）

安心して発言できた

ファシリテーターの「見る場所がポイントですね」という言葉が印象的だった。発言者の発言を尊重し、受容しながら進めてくださり、安心して発言できた。その中で、作品の見方のヒントを与えてくださったと思う。グループの雰囲気もとてもよいと思う。

自己の内面と向き合っている

2体が向かい合っているという点がポイントだと思う。自己の内面と向き合っているという印象を強く受けた。何か静けさを感じた。外に出てみると外の音や風などで、がらりと印象が変わった。外側は今後、さらに風化が進んでいくであろう。何年後にまた見てみたいと思う。

作家の意図を汲み取らせるかどうかの議論は？

非常に面白く、また難しい題材だと思った。ファシリテーターの方の言い替え方がうまく、大変参考になった。明日以降どういう形で進むのか楽しみ。しかし、前提として子どもたちの主体性を引き出すということがあるよう、作家の意図を汲みとらせる必要があるかどうかの議論はなしでいくのかとも思っているのだが…。

■課題作品を選んだ理由

前回もこの作品を取り上げて魅力を感じたから。遠見にはリアルな感じのする人体でありながらマネキンのような匿名性があること、対であること、ガラスを隔てて異なる環境に設置されていることなど、興味や感性を刺激する要素が多い。また、参加者の多くはこの作家の作品を見るのは初めてだと予想され、子どもも同様に先入観なく作品を見る体験ができると思ったので。（寺島洋子）

■ファシリテーター紹介

寺島洋子 国立西洋美術館学芸課主任研究員

1994年より国立西洋美術館で教育普及を担当。所蔵作品を多様な視点から楽しむFun with Collectionを毎年開催している。「04年より学校団体を対象とするギャラリートークを開始。最近は、幼稚園児と一緒に作品を見る機会もあり鑑賞の深さを実感する日々である。



■ 2日目のながれ

- ① 昨日に引き続き全体での話し合い
↓
- ② 4班に分かれて小学生対象の鑑賞プログラムの作成
↓
- ③ 経過報告
↓
- ④ 班ごとの発表



4人で鑑賞プログラムについて話し合う



経過報告



班の成果を全体に伝える

8月7日(2日目) 「 」はファシリテーターからの発言

① 昨日に引き続き全体での話し合い 13:30 -

- 子どもにとっての鑑賞とは？
 - ・ 今までには投げっぱなしの鑑賞だった
 - ・ 鑑賞の授業は子どもたちにとってどのような意味があるか？
 - ・ いろいろな見方があってよい。他者との違いを知り、認め合うことが大切
 - ・ 何も情報を与えない鑑賞でよいのか悩む
- 何を評価するのか？
 - ・ ねらいにより評価するポイントは異なる
 - ・ 楽しい鑑賞では評価できないか？
 - ・ 観点はある。鑑賞のテーマが、ねらいと通じていく
- どのようなシチュエーションで作品の事実を知ったときに、また作品に戻れるか
- みるためのポイントをタイミングよく出すことが大切

「現代の美術作品は比較的自由。古いキリスト教の宗教絵画には明確な事実がある。子どもが欲している時には事実を話すことがある。但し、子どもがそこまで語ったことが、それによって否定されないように気をつけている。一人ではなくみんなで見ることによって、その子どもの世界が広がることを意識している。答えは一つではない。学年によって、理解力、知識量によっても鑑賞の授業は変わってくるのではないか。授業を組み立てる時には、子どもたちに学ばせたい、伝えたいと思っていることをまず意識してから作品を選ぶ。今回はゴムリー作品をどのように楽しんでもらえるかを考えてほしい」

② 4班に分かれて小学生対象の鑑賞プログラムの作成 15:00 -

- 「このグループワークではプログラムを作成した結果よりも、作成するために意見交換する過程を大切にしてほしい」

③ 経過報告 16:05 - 16:25

■ 指導者研修について（記録係から）

鳥居 茜 国立新美術館学芸課研究補佐員

記録係として参加した私にとって今回指導者研修は、全国から集まった小・中学校の先生、指導主事、美術館学芸員といった立場の違う方々の考えに触ることのできる貴重な機会となった。最終的に鑑賞プログラムをつくるという目的のもとにグループワークは進められたが、プログラムをつくり上げるまでのプロセスに大きな

④ 班ごとの発表 17:10 -

A班 対象：小学校5、6年生 開題名：あなたはだあれ？

- ねらい：自分なりの見方感じ方で作品と向かい合い楽しむ
- ながれ：作品と出会い→自由に見る→気に入った場所をみつけ→教師は回りながら感想を聞く→気に入った理由でディスカッション→作品の対話に気づかせる→作品と同じポーズをとる→対話をワークシートに書く

B班 対象：小学校6年生

- ねらい：自分なりの作品の意味をつくり出すことができる
- ながれ：内側から見せる→ひとりでじっくりみる→気づきを語る（外側）→自由に見る→内側にもどり座る→何を話しているのか？などと問い合わせる→好きな場所で写真を撮る→ワークシートにタイトルとその理由を書く

C班 対象：小学校4年生

- ねらい：友達の考え方を聞き、自分と比較し、自分の思いを広げることができる
- ながれ：気づきを語る（内側→外側）→作品と同じポーズをとる→友達同士でポーズをアドバイスしあう→ポーズをとったときのガラスに映った様子も見させる→2対の関係を考える→自由に鑑賞→離れてストーリーを考える（ワークシートを利用）→発表→再び作品を見る

D班 対象：小学校1、2年生 鑑賞教育の入り口として

- ねらい：作品の特徴に目をむけ、よさに気づくことができる
- ながれ：事前学習はしない→作品と出会い→この人は誰かな？自由鑑賞→立ったり座ったりいろいろな角度から見る→気づきを発表→自分が一番見たいところから再び鑑賞
- ※事後学習を行いたいが、小学校1、2年生のため難しいと思われる
- 評価について：作品と出会い、自分なりの作品への関わり方が見られればよいのではないか

■ 受講者感想（2日目）

とても新鮮で楽しく

美術館、小・中学校における事例を出し合って、1つのプログラムをつくり上げていくのが、とても新鮮で楽しく感じました。なかなか学芸員の方とこんなに身近にお話できる機会も今までありませんでしたし、他県のようすをお聞きするのも大変勉強になりました。

話しやすかった

グループワークに入ると、なんだかそのグループが身内（？！）、仲間という感じがして話しやすかったです。またその中でもさらに4人グループに分かれて話し合っていましたが、これもまた短時間でいろいろな話ができる、プログラムもできてよかったです。グループのコーディネートをしてくださるファシリテーターの方が、とてもソフトでそれでいて安心感があり、「1つの立派なものをつくり上げなくてもいいですよ。その過程が大事だから」と言っていただいたのがよかったです。

指導案を作成することを目的とせず研修者一人ひとりの意見や疑問を引き出し、共有化させる運営の方の司会が大変印象的でした。無理に方向づけたり、結論づけないことにより、研修者が様々な問い合わせをもつことができたと思います。プログラムづくりについては、指導案を作成することを目的とせず、それぞれの立場、経験、要望、考えを交流しながら案を練り上げる行為や過程を大切にし、その中で研修者自身が鑑賞指導についての見識等を高めることをねらいとしたことがよかったです。



■3日目（発表）のながれ

①全4プログラムの説明

- ↓
- ②ねらい
- ↓
- ③ながれ
- ↓
- ④子どものとらえ方（評価）
- ↓
- ⑤こんな連携がしてみたい

■ファシリテーター反省記

昨年は、全体で1つの授業（案）をつくることから、ファシリテーターが本来の進行役以上に前に出すぎてしまい、参加者同士の交流や意見交換の時間を十分に取ることができなかつた。そのため参加者にとって授業（案）作成の面でも、交流の面でも中途半端な内容となってしまったとの反省から、今年は全員が発言する場と機会をもうけ、交流と自主性を尊重しようと考えた。まずは気持ちをほぐすことから始まった今回のグループワーク。初日は、ゆっくりと作品を見ることだけに終始した。2日目の授業（案）作成は、全体をさらに小グルー

鑑賞プログラム案

班名	D班	C班	A班	B班
■対象	小学校1、2年生	小学校4年生	小学校5、6年生	小学校6年生
■ねらい	作品の特徴に目を向け、よさに気づくことができる	友達の考えを聞き、自分の考えと比較し、さらに自分の思いを広げることができる	作品になりきって対話することができる	自分なりの作品の意味をつくり出すことができる
■ながれ	<ul style="list-style-type: none"> ・立ったり座ったりいろいろな角度から見る ・気づいたことを発表し合う ・自分が一番見たいところから再び鑑賞させる 	<ul style="list-style-type: none"> ・作品とポーズをとる。友達同士でポーズをアドバイスしあう。ポーズをとった時のガラスに映った様子も見させる ・離れてストーリーを考えさせる。ワークシートを活用 	<ul style="list-style-type: none"> ・お気に入りのスポットを見つける ・誰と話しているのかなど投げかけ、対話していることを気づかせる ・対話している内容を考えて、ワークシートに書く 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の好きな場所に行き、デジカメでそれぞれ好きな場所から写真を撮る ・ワークシートに自由につけたタイトルとその理由を書かせる
■子どものとらえ方（評価）	鑑賞時のつぶやき、発表	子どもたちの発表 ワークシートの書き込み	鑑賞している姿 ワークシート	行動やつぶやきの観察 ワークシートの内容
■こんな連携がしてみたい				20名ずつ2グループに分かれ、学芸員と教師の双方がギャラリートークをする

ブに分けたことで、それぞれに発言と参加の機会は増えたのではないかと思う。

しかし、ファシリテーターは、授業（案）の完成と交流という2つのどちらをより強くイメージしてグループワークに臨むべきなのかが私自身の課題として残った。限られた時間の中でのことだけに、明日にでも使える授業事例をもって帰れるように作業を進めるのがよいのか、それとも参加者の中で疑問や課題となっていることについて意見交換できる機会を大切にして進めるべきなのか。参加者のバックグラウンドによっては、研修に期待するものも異なるだけに迷うところである。（寺島洋子）

■講評

三澤：ゴムリーの作品は人間の形ですから、生徒が自分自身を投入しやすい作品だと思います。内面的なことを感じ取らせるプログラムになっていますが、その内面を表出させてどのように他者と交流させるか、そこらへんの手立てはどのようなのがありますか？



発表者：授業のながれの中に発表の場は設けてあります。時間がない場合は、書いたワークシートを教室に貼って、交流会を持つことも考えられます。

三澤：その交流会が非常に重要なとなるのかどう感じがします。作品に自分を投影して、それをどうやって出していくか、そこらへんが非常に面白いなと思います。ぜひ実践してみてください。

■Data

課題作品 萬鉄五郎『裸体美人』

1912 重要文化財

受講者 15名

構成 中学校教員 8名

指導主事 3名

学芸員 4名

ファシリテーター 三澤一実

記録係 豊田直香

■1日目ながれ

①はじめに（自己紹介30秒）

↓

②悩み・課題や各地の事例

↓

③鑑賞の評価について

↓

④課題作品のプログラムづくり

↓

⑤感想

↓

⑥プログラムの提案・考案

↓

⑦どんな学びができたらしいか？

↓

⑧私の見方（私はこう見る）



8月6日（1日目）

①はじめに

交流をキーワードとして、課題作品の前に車座になって座り、参加者15名の自己紹介（各人30秒程度）を行う。その後、参加者の方々の悩みの共有・課題を出していく

②悩み・課題や各地の事例

- ・学校から来てくれるは本当に近隣のみ
- ・学芸員と先生の交流の場がある。しかし、作品の学校への持ち出しが、年に数回。僻地ならば可能だが、微妙な立地の学校には難しい
- ・現代美術の立場からは、ビデオアートの出前授業の可能性も

③鑑賞の評価について

- ・言葉でできる子は評価しやすいが、苦手な子はテストで補足も
- ・大規模校はボランティアの協力、分けて訪れるなどの工夫が必要
- ・美術館の管理の問題×学校の評価の問題=共有から相互理解を

④課題作品のプログラムをつくってみよう

- ・5分間でアプローチを考察
- ・中学で紹介するには衝撃的な作品→どのように鑑賞に活用するか？

⑤感想

- ・好きな理由：色の大胆さがいい、おおらかさがいい、など
- ・嫌いな理由：腋毛、緑と赤の色が強烈で生理的にだめ、など
- ・輪郭線に統一感がない、なぜ顔にだけ黒の輪郭線が入るのか？
- ・鼻と腋毛がいい=笑わせる感じ、プライベートな感じがする
- ・萬の自画像、モディリアーニの裸婦像などを一緒に並べてみたい=比較で見せてもいいのでは？

⑥プログラムの提案・考案

- ・画家の視点からアプローチしたい
- ・色彩：赤と緑の補色関係、色彩の強烈さ、色を置き換えて考える
- ・背景を自分で描いてみよう。→ワークシートがてくれる
- ・「なぜ裸か？」という子どもならではの質問が出るのではないか？
- ・中学生に見せることに対する恐怖感のある作品
- ・なぜこんな絵を描いたのか？という疑問を生徒に投げかけてみる
- ・生徒に色々な視点や描き方をしていいということを感じてほしい
- ・学校と美術館、双方での授業のメリットを考える

⑦どんな学びができたらしいか？

- ・作者の信念を感じ取らせること。その発問方法は？
- ・なぜ描いたか？
- ・さまざまな見方の1つでもわかればいい
- ・鑑賞対象として取り上げる意味を教員側、学芸員側が考える必要がある
- ・学年の絞込み→今回は中学3年生をターゲットに考えていく

⑧私の見方（私はこう見る）

- ・顔や背景が足などに対して未完成ではないか？
- ・部分による描き方の違い、例えば雲だけ描き方が違うのでは？
- ・本当にこの場所で描いたのだろうか？
- ・同時代の作品と並べた時、明らかに異質。時代を感じ取せる
- ・ちゃんと描いている草と、いい加減に描かれた草との混在

2日目へ

- 中学3年生をターゲットにした授業プランの考案
- ・この絵を見たことによってその生徒がどのように変わるかなどを念頭においてプログラムを考案してみる

■受講者感想（1日目）

貴重な意見がたくさん

使い方によってはとても面白い作品だと思った。視点位置の問題から教材の導入を進める方法や、最初の印象からくる色彩のイメージから子どもたちに意見を出させるという方法など、様々な意見を聞くことができたと思う。グループの雰囲気は、最初はなかなか意見が出なかったが、後半になるにつれ、どんどん意見が出るようになったので、結果的によかったです。

学校の授業が前提

作品はよく知られたものだったが、あらためて実作品をよくみると、今まで気づかなかっただ細部に気づき、また全体の印象もこれまでとは少し違うように感じた。学校の授業が前提ということもあり、「ねらい」「到達点」「組み立て」を意識した内容で、先生方の意見も実際に生徒に見せる場合を思いながらのものが多かった。美術館側の人間としては、そのような思いや事情をいかに汲みとり、時にはぐらかしたり、壊したりしていくかが問題になると思った。グループはまだ硬い雰囲気。ファシリテーター対参加者のやりとりが多かった。

■ファシリテーター紹介

三澤一実 文教大学准教授

1991年、埼玉県の公立中学校教諭となる。当時校内には掲示物は一切なく、書き初めを飾るとライターで火をつけられる始末であった。翌年から「生徒が自ら学ぶ主体的鑑賞指導の研究」に取り組む。校内の掲示環境を整え、鑑賞授業に取り組んだ。生徒作品を額に入れ丁寧に飾ってあげると悪戯されなかつた。2001年、埼玉県立近代美術館主査、翌2002年から文教大学に勤務。長野県東御市梅野記念絵画館の運営委員などを務める。

■課題作品を選んだ理由

この絵は中学生にとって衝撃的な絵であるはずだ。授業では扱いにくい作品なのではないだろうか。だからこそ、グループワークを通して感じ方を出し合い、作品をよく見て、どのように鑑賞活動を組み立てたらよいか考えることができる。教員、指導主事、学芸員、それぞれの立場で知恵を出し合い協働できた時に優れた鑑賞教材ができるはずだ。また、できなくても議論を重ねる中で何か得られるものがきっとあるだろう。じっくりこの絵を見ていると不思議さやおもしろさにだんだん気づいてくる。資料などを読んでみるとおさらこの絵に惹かれてくる。このような扱いにくい作品を避けて通るのではなく、立ち止まって考える時間にしていきたい。鑑賞者にとって好き嫌いがはっきりとしているような作品なので、鑑賞活動を通して各自の感じ方が変容していく可能性も大きい。

その様な課題を多く提供してくれる『裸体美人』だと考えている。（三澤一実）

■ 2日目のながれ

①本日の課題

↓
②3つの班でプログラム考案↓
③各班の鑑賞プログラムのプレゼンテーション

話し合いのようす



事例紹介2で紹介されたアートカードを見ながらプログラムを検討



アートカード (詳細は98頁を参照)

8月7日(2日目)

①本日の課題

- ・美術館の活用、学校との連携を中心課題として、授業プログラムを考案する
- ・作家・作品の知識提供は必要なのだろうか
- ・中学3年生は義務教育の最後の学年。社会に出る前の最後の美術の授業になる可能性のある時期
- ・美術館には作品=ハードと、学芸員・研究など=ソフトがある
- ・楽しければいいという美術ではなく、教育的・社会的意義を考えなければならないのではないか

②3つの班でプログラム考案

- ・A、B、C班に分かれてプログラムを考案する。各グループで発表者を決める。話し合いの内容は以下の通り
- ・ねらいを考える(30分間)
- ・授業の具体的展開を考案する
- ・班ごとに話し合った項目を、適宜発表しフォーマットに記載して完成させる。このフォーマットが3日目の全体発表の下敷きになる
- ・時間の最後に各班の意見を統合して、あるいはそれぞれの見解をあげて、3日目の成果発表につなげる

③各班の鑑賞プログラムのプレゼンテーション

A班

■ねらい

作品が生まれた背景、作者の心情を想像することができる

1. 単純に絵から受ける印象
2. 描かれている形や色、筆づかいなど自由な表現に気づこう

■ながれ

画像を白黒に変換し、形態に注目してもらう。色彩の大胆さに気づく。色相、明度、筆づかいなどにも気づくきっかけになるのではないか

B班

→明日の発表原稿として採用

C班

■ねらい

題名『裸体美人』にある「美」に注目する

●学校での授業(1コマ目)

1. 美のとらえ方の多様性に目に向けることができる
2. 作者がこの作品で表現したかった内面的な美に気づく

●美術館での授業(2コマ目)

美術館に実際に赴き、生の作品を見て美を表現するための方法や工夫を知る

■ながれ

1. アートカードの中から美人だと思うものを選び、その理由を考える
2. その理由を交流する→美のとらえ方の多様性に気づく
3. 「裸体美人」を何らかのツールで見せ、美しさを探る
人物の美しさについてグループトークし、発表する



■一記者の目から見た研修

豊田直香 京都国立近代美術館学芸課研究補佐員

私が記録を担当したEグループは、萬鉄五郎『裸体美人』がプログラム作成の対象でした。初日、参加者15名が作品を前にまず自己紹介を行い、続いて、鑑賞教育に関する各個の意見が交換されました。2日目、3班に分かれプログラム作成に向けての討議が行われ、意見統一が成立し現実的なプログラムが作成できた1班のみ、最終日に作成プランが発表されました。残り2班は参加者の意見が分かれプログラム作成までに至りませんでしたが、そこで交わされた討議

は、「鑑賞教育の意義」、「作品鑑賞とは何か」という根源的な問題を問う議論であり、とても意義深い討論であったと感じました。結果だけではなく、過程に於けるこうした対話も容認され重視されたことで、今回の研修が参加者の多様な期待の一部に柔軟に対応できたのではないかでしょうか。今後に向けての現実的な課題としては、参加者増加による時間配分の問題、教師・指導主事・学芸員の参加者の比率の問題、鑑賞作品選択の問題など、解決すべき点があります。この研修がこれらの課題を確實に解消し、学校の個別の現場と美術館との柔軟な連携が可能な、多様なプログラムを発想できる機となることを願っています。

■受講者感想(2日目)

とても意義があった

とても話しやすい空気を研修スタッフの先生方につくっていただいたことに感謝しています。協力してつくり出す教材研究でも、美術館の方と意見を交えることができたことに、とても意義があったと思います。

反省させられた

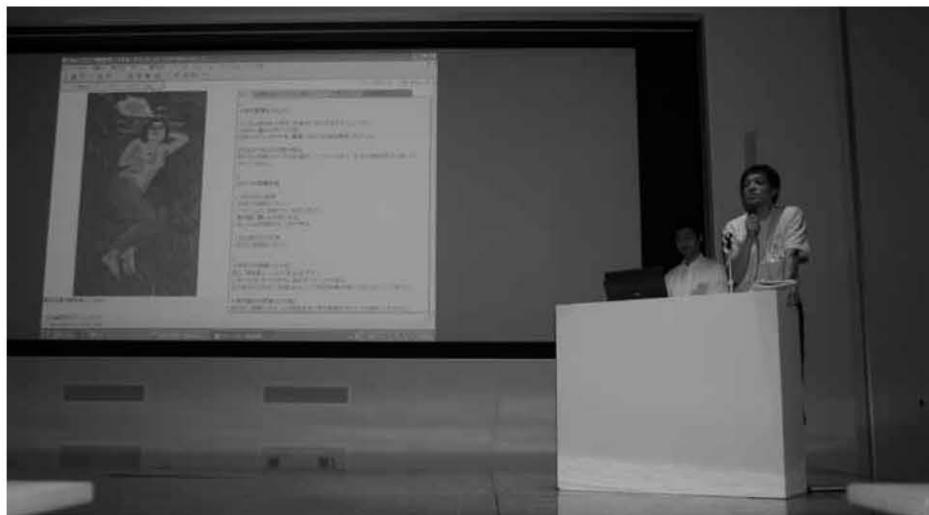
美術館学芸員として参加しましたが、学校に特有かつ不可欠な評価ということを考えさせられ、非常に参考になりました。今まで作成してきた子どもも向けワークシートが、美術館のみの考え方でつくられ、学校側にとっては使いづらいものだったのでないかと反省させられました。

美術の授業だけにとどまらず

グループワークでは、メンバーに非常に恵まれ、大変活発に意見が飛び交いました。子どもたちの発達過程を熟知しておられる先生方の経験の裏づけにより、美術の授業だけにとどまらない、人間の成長過程に必要なあても含められたことは素晴らしいと思いました。

美人か、美人でないかは問わず

3グループに分かれた時、「美人」でまず話が盛り上がりました。三澤先生が「この絵を鑑賞させるねらいは、子どもが今まで『美しい』と思っていた範疇にはない美しさがあることに気づかせることだ」とおっしゃって、皆なるほどと思いました。そこで、美人か、美人でないかは問わず、作者は「美しい」といっているのだが、どこがどう美しいのだろう?とズバッと問い合わせていこう、ということになりました。



■ 3日目（発表）のながれ

①3つの班での話し合い報告

↓

②採用案の授業形態の説明

↓

③ねらいの説明

↓

④三つ折ワークシートの説明



■ Eグループのファシリテーターとして

今回、中学校教諭と学芸員、指導主事で構成されたEグループのファシリテーターを務めた。課題作品は萬鉄五郎の『裸体美人』である。この作品は多感な思春期を迎える中学生の鑑賞題材としては非常に扱い難いだろう。しかし、この鑑賞題材を考えることは必ず参加者の大きな力になるはずである。話し合いの進め方にも留意した。1日目はファシリテーターと言うよりも司会として話し合いを進めていった。それは、この『裸体美人』を表面的にとらえるのではなく「なぜ、裸体なのか」「なぜ、美人なのか」という、作品の本質に迫る議論を共有した

いと考えたからである。どんな作品でも鑑賞の題材にすることはできよう。しかし、鑑賞のおもしろさは作品を通して子どもたちが哲学することだと考えている。そのためには教師自身が作品の背景に見え隠れする作者の考え方や教師自らの作品に対する感じ方を自覚し、わかりやすい言葉に置き換えて子どもたちに投げかけたり、引き出したりしていく必要がある。ということで、Eグループはいきなりハードなスタートを切った。

2日目は小グループに分かれ議論した。昨日の議論が功を奏したのか、それともじゅまをしたのか、具体的に題材化していくグループもあれば、美とは何か、という本質的な話し合いが続いているグ

鑑賞プログラム案

■対象：中学校3年生

■ねらい

- ・表現の多様性に気づく
- ・美術館への親しみをもつ

■三つ折ワークシートの提案（どの作品でも使える）

①学校 1～2時間

● STEP1 まず静かに鑑賞

- ・見てわかった、感じた、考えたことを記入
- ・対話型で発表
- ・類型化して板書（色彩、形、人物、背景、技法）
- ・類型ごとに分析的に掘り下げる（友達との感じ方の違い）

・第一印象との違いを比較

● STEP2 1クラスを6グループに分ける

- ・疑問をもとにグループ分け
- ・仮説、根拠などを立てる

● 学芸員に挑戦（学芸員さんへの手紙）

②美術館

● 学芸員のレクチャー

- ・作品への疑問をもつこと、見方の多様性をほめてもらう（知識は最小限）
- ・この作品に影響を与えた作品、影響を受けた作品を教えてもらい、館内を見てまわる
- ・最後に感想

ワークシート

おもて

STEP1 第一印象	STEP2 ・疑問 ・仮説 ・根拠	参考資料 何が描いてあるか 作品のカラーコピー 本時の感想 美術館に行行った感想
---------------	----------------------------	--

うら

評価のポイント 評価のポイント	作者について なりきりキュレーター	なりきりキュレーター
美術館でのマナー 美術館でのマナー	キュレーターについて 学芸員に挑戦（学芸員さんへの手紙）	学芸員に挑戦（学芸員さんへの手紙）

ループもある。学芸員と教師との見解の違いも明確になったり、またそれによって協力できる範囲が見えてきたと感じる。反省点としては各グループで話し合っている内容を全体で共有する時間が少なかったことである。また、極力口を挟むことを控えたが、お節介な性分はどうしようもなく口を出し過ぎたかもしれない。

教師自身が深く追究したり、思いを巡らし考えていくことは、実はシンプル且つ摇ぎない答えに到達するための手段であろう。しかし限られた時間の中ではなかなかそこまでたどり着けない。最後まで悩み続けた様子の先生の顔が忘れない。参加された方々、皆さん素晴らしいでした。（三澤一実）



講評

奥村：作者の表現意図や時代背景について学芸員から最低限の説明をしてもらうということが出来ました。それは、子どもの「こういったことが知りたいんだけれど」ということに対する説明ということだと思います。学芸員の立場になって考えると、子どもが質問してきたら、答えないといけない。そういう意味での時代背景とか作者の表現ということなのでしょう。子どもの立場から知識をとらえ直す必要があるということです。学芸員の立場に立ってみると、大変だなど身を引き締めた次第です。